

町民参加の町史づくり



竹富町史たより

第51号

2023年3月31日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1
TEL (0980) 87-6257

目 次

『竹富町史だより』〈第 51号〉発刊にあたって	(石垣久雄) ... 1
西表島祖納クシムリ御嶽神司引継の儀	2
知られざる波照間島の自然	(島村賢正) ... 4
1984年以降の波照間島近海におけるトビ魚漁業	(波照間純一) ... 14
「波照間之碑」と象設計集団	(服部 敦) ... 16
「波照間文化協会」2年余の軌跡	(西前津松市) ... 22
「稲作栽培」から「サトウキビ単作」の波照間島	(通事孝作) ... 27
島の〈小さな経済〉を担った卵	(古谷野洋子) ... 34
〈島々の踊り・狂言 No.9〉イヤル節	35
『竹富公民館日誌』の紹介〈抜粋〉—日本復帰後の竹富島—	36
西表開発に関する収集資料	(川平成雄) ... 43
西表島古見村に関する資料目録	52
2022年度受贈図書一覧	59
第44回竹富町史編集委員会議事録	62
2022年度竹富町史編集係業務日誌(抄)	66
竹富町内の島々に資料館機能を持った施設の設置を —竹富町史「島々編」を形に—	68
編集後記	70

表紙 西表島祖納クシムリ御嶽神司引継ぎの儀

イビの手前の拝み処での一枚・手前にはこれまで20年間神司を務めて
来られた出盛幸子さん(72)。奥には後継の田村心さん(23)。一連の儀式
を経てクシムリ御嶽の新たな神司へと受け継がれた。

『竹富町史だより』〈第51号〉発刊にあたって

竹富町史編集委員会

委員長 石垣久雄

『竹富町史だより』〈第51号〉の発刊となりました。〈第51号〉は、巻頭に本号表紙の解説を配し、主として波照間島に関する内容になっております。『竹富町史 第七巻 波照間島』（以下、『波照間島編』）には収録されていない次の論考六つを掲載します。

- ・島村賢正 「知られざる波照間島の自然」
- ・波照間純一 「1984年以降の波照間島近海におけるトビ魚漁業」
- ・服部 敦 「波照間之碑と象設計集団」
- ・西前津松市 「波照間文化協会2年余の軌跡」
- ・通事孝作 「稲作栽培」から「サトウキビ単作」の波照間島
- ・古谷野洋子 「島の〈小さな経済〉を担った卵」

さて『波照間島編』は、2018年(平成30)3月に発行されました。発行以前からの予約や、「いつ本はできるの？」という問い合わせを度々いただき、本書に寄せる大きな期待が感じられました。発刊後も売れ行き好調で、2020年(令和2)には品切れになりました。その後も、竹富町史編集係への問い合わせは絶えず、第41回竹富町史編集委員会(2020年3月開催)で「ぜひ増刷を！」という声があがり、『波照間島編』〈初版第2刷〉の刊行が決定いたしました。

この増刷にあたって、『波照間島編』の専門部会が開かれました。専門部会は初版の誤字脱字の訂正や、第12章「人物」での重大な事実誤認などの訂正に留めることにしました。また、2018年以後の事象は追記しないことなどを決め、増刷にとりかかりました。

2022年(令和4)3月、『波照間島編』〈初版第2刷〉が発行されました。このことによって、『波照間島編』の購入希望者に応えることができるようになりました。〈初版第2刷〉の刊行にあたっての訂正箇所一覧表が『竹富町史だより』〈第50号〉の65～72頁に掲載されていますのでご参照ください。

竹富町発行の「島じま編シリーズ」の編集・発刊も残すところ『竹富町史 第四巻 黒島』『竹富町史 第八巻 西表島』のみとなりました。既刊の『竹富町史 第二巻 竹富島』『竹富町史 第三巻 小浜島』『竹富町史 第五巻 新城島』『竹富町史 第六巻 鳩間島』『竹富町史 第七巻 波照間島』は、八重山地域では石垣市内の書店をはじめ、南ぬ島石垣空港や竹富町役場の売店でも好評発売中です。また、竹富町への「ふるさと納税」の返礼品のひとつに加わりました。

「島じま編シリーズ」が竹富町民をはじめ、広く読まれて活用されているようです。竹富町刊行物を用いて、学習会を開催したとか、伝統行事の次第を確認したという話などをうかがうと、編集委員の一人として幸甚の至りです。私たち竹富町史の編集に携わる者は、今後も「町民参加の町史づくり」をモットーに邁進する所存です。

西表島祖納クシムリ御嶽神司引継の儀

2022年（令和4）12月22日冬至、西表島祖納のクシムリ御嶽において、神司引継ぎの儀式が行なわれました。

クシムリ御嶽について、『八重山のお嶽』(*1)には次のように記されています。

後森御嶽（クシムリウガン）

所在地 竹富町字西表祖納

神 役 神司・田盛ユキ、テジビ古見用美

お嶽創建の由来

本嶽は『八重山島由来記』には記録されていない。『西表島の伝説』では「一名雨ウガンともよばれ、五風十雨を賜りますよう祈るところである」と記している。大竹御嶽と兄弟オンで、雨を司る神を祀るとされているが、火の神も一緒に祀られているという。祖納崎ではいちばん子の方角にあるので「ニーヌフワオン」ともよばれているようである。わらぶきの拝殿、少し下ってイビの前（拝み処）、その奥にイビがある。そのイビの前付近で大浜永亘氏が鉄滓を多量に発見（一九八五・六・一六）、ここはかつて鍛冶屋であったことを物語っている。土器、貝殻なども表面採集された。慶来慶田城家系統の古記録には「阿立御嶽」と記したものもある。

現在、クシムリ御嶽の拝殿は瓦葺きに造り替えられているものの、冬でもなお緑深い木々に囲まれた祖納上村の北側に、神司、チヂビ、氏子らに支えられ、その姿を今に伝えています。

前回の神司交代儀式は、2002年（平成14）12月22日。田盛雪さん（当時81歳）、宮良チエコさん（同79）のお二人から出盛幸子さん（同52）に引き継がれました。その時は40数年ぶりの新神司の誕生だったとのこと。あれから20年。今回2022年（令和4）の引継ぎ儀式の日は、偶然にも前回と同じ12月22日でした。（*2）(*3）



『季刊・生命の島』(*4)掲載の、「島をまもって半世紀—西表島の神司・田盛雪さんのお話」に、神司の交代の儀式のことが書かれています。

神司の交代の儀式を「ツギユリ」

といい、ツギユリをするのは午か酉か寅の神年を選びます。田盛雪さんが御嶽に入ったのは寅の年、そして卒業したのは午の年とあるので、実に40年間神司を務められたこととなります。（その時、田盛さんから引き継いだのが出盛幸子さん）

「ツギユリ」について調べてみたところ、「ツギユリ」そのもので検索できたのは、前述の田盛雪さんのお話のみでしたが、ツギユリと似た言葉に「カンユリ」という言葉を探すことができました。『竹



富方言辞典』(*5)には、

カンユリ=①御嶽の神、氏神などを信奉していた人が死去した際、願い下げること。②ヒッカサ(神司)が引退すること。ユリは「許し、許可」のこと。「神の許し」の意。ヒッカサの役職につくことをカンピラキという。



ちなみに、カンピラキ=新しくヒッカサ(神司)に就任すること。「神開き」の意とあります。同様に『鳩間方言辞典』(*6)にも、「ユリー」は、「許可。許し。」とあります。「ツギ」の意味としては、

ツグン=継ぐ。『西表方言辞典』(*7)には、チグ=継ぐ、相続すること。とあります。

このことから、「ツギユリ」の語源は、「継ぐことを許される」であり、「神司が引退し、引き継ぐことを許される儀式」と解釈されるでしょうか。

文献によると、八重山の神司は、古くから村の宗家(トゥニムトゥヤー)生まれの女子が継承する慣例となっている(*8)。神司、チヂビは特定の家系から選ばれる(*9)。^{カンヌツァ}神女になる人は昔から同血統の女性の中から霊力高い適当な者を選んで当てる(*10)。というように、代々一族で受け継がれてきたことがわかります。

一方で、後継者問題については「各お嶽の神司は明治の年代頃までは古制が守られて、後継者の就任には特別のトラブルがなかったらしいけれども、大正年代以降は次第に敬遠する風潮が生まれ、トラブルが多くなりつつある。ことに戦後がかつてない後継者難に陥っており、この面からもお嶽信仰は重大な局面に臨んでいるといえよう(*11)」との記述もあります。

今回、クシムリ御嶽では神司を出盛さんの姪にあたる田村さんへ、同時にチヂビは出盛さんの兄である古見代志人さんから、その息子の古見浩之さんに引き継がれました。

さて、引継に向けて神司の着る衣装の準備、料理の仕込みや手配、拝殿の掃除や場の準備にいたるまで、家族はもとより、多くの人が協力して用

意してきたとのこと。「若い神司だからこそ、皆で支えて応援していかないとね」と料理や裏方のあれこれを仕切っていた公子さん(与志人さんの妻)の言葉に、家族や地域の絆があってこそ、儀式が滞りなく進行できたのだと感じました。

この日、白朝衣を「最後のつとめ」と丁寧準備する出盛さんの姿は、自身が受け継いできた神司を次の世代に繋げたという誇りと安堵で満たされているように見えました。

今回、儀式が行われたクシムリ御嶽には、我々町史係のほかに西表小学校の児童や教員の方々、研究者、写真家、家族の中から記録係を指名して写真や動画を撮影していたことも印象に残りました。儀式や祭事を継承していくことの大切さと同時に、文字や映像だけでは伝えることのできない、場の空気を一緒に体験できる贅沢な時間を過ごさせていただきました。貴重な儀式の場に同席させていただきましたクシムリ御嶽の神司、チヂビ、氏子の皆さまに感謝申し上げます。

(米盛恭子)

【参考文献】

(*1) 牧野清『八重山のお嶽』(1990)。(*2) 『八重山毎日新聞』2002.12.26付。(*3) 『八重山毎日新聞』2022.12.26付。(*4) 安溪貴子・安溪遊地「島をまもって半世紀—西表島の神司・田盛雪さんのお話」(『季刊・生命の島』(68号)2004.9.25)。(*5) 前新透著『竹富方言辞典』(2011)。(*6) 加治工真市著『鳩間方言辞典』(2020)。(*7) 前大用安著『西表方言辞典』(2002)。(*8) 前掲(*1)。(*9) 前掲(*4)。(*10) 宮城文『八重山生活誌』(1972)。(*11) 前掲(*1)。



知られざる波照間島の自然

竹富町教育委員・町史編集委員

島村賢正

はじめに

波照間島は竹富町で2番目に大きな島で、4番目（有人島では3番目）に高い島である。また、日本最南端の有人島で、竹富町の他の島々のように、水深の浅い石西礁湖で守られた島々とは異なり、石垣島からの定期船は波高3～4mにもなると欠航することがある。それ故、私はベシマ（我が島）を「与那国は外国ですが、波照間は海外です」と紹介する。辺境の与那国島へも渡った明治時代の探検家・笹森儀助でも、波照間島への渡航は断念したほどである。

石西礁湖南端のパナリ（新城島）・下地島を過ぎるとすぐに太平洋のうねりで船が上下左右に揺れて、その心地よい揺れが波照間島入港直前まで続く。しかし、その約22km間の最大水深は400mにも達するので、台風来襲前後には、船が波頭に乘ると周りをぐるりと360度見渡せ、波底では周りが波で囲まれ空が小さくなる。焼き玉エンジンから出る鼻をつく強烈な匂いと激しいローリング・ピッチングで吐き気が襲って起きていられず、洗面器を枕元に置いて横になった。エレベーターやジェットコースターを知らなかった幼少時に、お尻がスーとして、体が押しつぶされるような経験で加速度を知る貴重な体験をした。

島はその大部分が琉球石灰岩に覆われた隆起サンゴ礁から成る低島で、4段にも及ぶ海岸段丘や大きな2つの断層（慶原断層と高那崎断層）に加え、中小の断層が幾つも見られる。低島としては珍しく発達した鍾乳洞が見られ、太

平洋の荒波が洗う海（アライン：荒い海）の南東海岸にはサーフベンチや断崖絶壁の荒磯、津波や台風で打ち上げられた無数の岩塊、北西の海（ヤライン：柔らかい海）の海岸は穏やかで長い砂浜や広い砂丘など独特な地形が見られる。また、島西部の富嘉村の付近には島尻層（クチャ）の養分に富んだ土壌・ジャーガルが露出し、また浅い所にみられるので、1960年代初頭まで天水田による稲作が行われていた。八重山地方で島尻層が地表で見られるのは波照間島だけで、島の主産業であるサトウキビ製糖業は、貯水池造成時に掘り出されキビ畑に客土された泥土・ジャーガルに大きな恩恵を受けている。

以下に、他の島々には見られないまたは島の住民も目にすることが少ない、『竹富町史 第七巻 波照間島』にも掲載されていない島の地形や現象、動植物を紹介したい。

1. 地形と現象

① マートウルワー

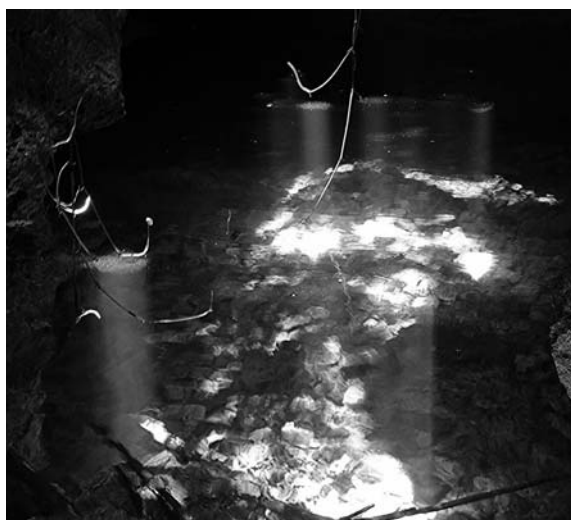
—神秘的な光の柱1年に1日だけの地底のハテルマブルー—

1年に3日だけ誰でも入所を許される拝所・ピテヌワー（畑の拝所、野原にある拝所）が三つある。その一つ富嘉村の拝所・マートウルワー（真徳利御嶽）には、断層の切れ目にできた洞窟・スーイン（潮の洞窟）がある。スーインの底・地下8mに、海に繋がっていると思われ、わずかに塩味のする水の透き通った小さな池がある。1年に3日、この地底池のハテルマブルーを見ることができる。

しかし、この神秘的な青色の光柱は5月、6

月（旧暦4月）のミヤクツェ（またはミワクツェ：御嶽や神道の掃除）の1日だけにしかお目にかかれない。加えて太陽が南中する午後1時前後の数十分間しか見ることができない極めて希な現象である。日本では有人島最南端の波照間島は最も北回帰線に近く、夏至に近いこの時期のこの時間にしか日光が池底まで届かないからである。

ニシパマ（北浜）のハテルマブルーは有名で多くの皆さんが見ているが、この地底のハテルマブルーと光の柱を見た人は極めて少ない。



② シィサバルワー

—地底のマリア象、隠れキリシタンが拝んだものか？—



シィサバルワー（白郎原御嶽）は、南村と北村の拝所・ピテヌワー（畑の拝所、野原にある拝所）であるが、現存する洞窟では島最大の鍾

乳洞がある。その支洞の狭小な場所にこのマリア像と呼ばれる鍾乳石がある。17世紀中頃に起きた八重山キリシタン事件で波照間島に流刑になった信者たちが密かに拝んだ石像という伝承がある。狭い隙間を這いつくばって入れた者しか拝めない貴重な石像である。

③ シィサバルワー

—一人頭税時代の地底の機織り場？—

シィサバルワーの鍾乳洞の底、薄日の差す入口付近に整然と積まれた数列の石積みがある。1年を通して気温が一定で湿度が高いこの環境は機織りに適した場所と思われることから、人頭税時代の機織り場と推察されている。島の乙女達が薄暗い洞窟の中で懸命に琉球王朝への貢納布を織っている姿が目浮かぶが、科学的な調査・検証は行われていない。



④ ブドゥマリパマ

—湧水の作った自然の溝—

島の北部と西部の海岸には地下水が湧き出ている。北岸のブドゥマリパマ（大泊浜）東端の石灰岩の崖下にケーラと呼ばれる拝所がある。海岸では八重山唯一の自然の小さな湧水溜まりと水路がある。農地基盤整備以前は、この湧水は白い砂浜に流れ染みこんで海に流れていた。しかし、土地改良で地下水系が埋まって水が枯れた今では、その面影すらも見えない。石灰岩

層を通ってきた地下水に含まれる豊富な炭酸カルシウムが砂に沈殿・吸着（トウファ）してこの水路を作ったと考えられる。しかし、台風時の高波・荒波により、白砂が浚われ取り除かれた時のみに自然の造形がその姿を現す。その崖の上には、第2次世界大戦直後のマラリア地獄のなかで、島民の命をつないだソテツの古株が偉容を誇っている。



⑤ ニシムドリ・タカナ・ブドゥー —大海に面した荒磯—

島の北東や南東の荒磯岸壁・ニシムドリ（北戻り：波が岸にぶつかって戻る）やタカナ（高那）、ブドゥー（大きな凹み）に見られる波食崖と波蝕棚（台）である。

前面にはサンゴ礁が見られず、潮の干満にかかわらず、年中いつでも大海のうねりと台風の高波が岸壁を叩きつけている。穏やかなサンゴ礁海岸の岩礁に見られるノッチ（ひさし）は、ここでは荒波により打ち壊され、その岩塊は海底に落ちるか岸壁の上に打ち上げられており、岸壁はほぼ垂直に屹立している。

その基部に干満により海上に現れたり隠れたりする波蝕棚が見られる。そこには後述する厳しい環境に適応したアナダコやジンガサウニが生息する。通常でも数mの白い波しぶきが見られ、台風時には数十mにもなる水柱が打ち上げられる。打ち上げられた波しぶきは、内陸

に塩分を届けて島の土壌を肥沃にしていると思われる。このような荒々しい海岸は八重山では数少ない。



2. 植物

⑥ カレンコウアミシダ（シィサバルワー） —洞窟内のシダ植物—

竹富町希少野生動植物のカレンコウアミシダは、これまで八重山では高島の石垣島と西表島だけが自生の報告がされていた。このシダが、シィサバルワー洞窟内の薄日が当たるごく狭い空間に局所的に生育している。このシダは、南はスリランカから北は鹿児島県の沖永良部島まで分布し、自生地は主に石灰岩地である。波照間島ではシィサバルワー以外では見られず、なぜ外海に隔てられた波照間島に分布し、この小さな洞窟で細々と生き残ってきたのか不思議である。



⑦ クロボウモドキ (シィサバルワー)
—世界で3島だけに自生—

西表島と波照間島、蘭嶼（紅頭嶼：台湾本島の南東沖にある面積約48?で波照間島の約3倍の孤島）のみに自生する極めて珍しい樹木で、国や県の絶滅危惧I類・竹富町特別希少野生動物植物に指定されている。1973年（昭和48）に西表島で発見され、1979年（昭和54）にリュウキュウガキの沖縄方言名・クロボウに似ていることから命名されて新種記載された。

波照間島や西表島では、台風の強風を防いでくれる御嶽や海岸段丘や、断層崖などの古い琉球石灰岩地の鬱蒼とした林内に生育する。樹高約6mになる常緑高木で、幹は直立して側幹や太い枝はなく、高い位置にある中小の枝に細長い6枚の花弁の特徴的な花が数個も集合している。果実は枕状楕円形で緑色から赤色を経て黒紫色に熟し、熟果の果肉は甘味がなく種子は軽くて水に浮く。実生は親木の近辺に多数見られることや野鳥がこの熟果をついばむ姿も見られないことから、何故この3島のみに自生するのか不思議である。種子が軽いことから蘭嶼からの海流による漂着分布が考えられるが、波照間島では最も高い標高約60mの林内だけに自生することや、他の島々では見られないことなどから、益々この植物への疑問が尽きない。



⑧ ギョボク(ブリブチ公園・慶原断層)
—わずか数株が自生—

竹富町の町蝶であるツマベニチョウの食樹であるギョボクは、ブリブチ公園や慶原断層の琉球石灰岩地の限られた局所に、数株だけ生育している。公園整備でそれと知らずに伐採されたり、林内で他の樹木に覆われたり、ヨコバイに葉の樹液を吸われ樹勢の弱った株もみられ、島でのギョボクの存続が危ぶまれている。

ギョボクの少なさが原因かどうかは分らないが、ツマベニチョウはめったに見られない。ここ数年間は成虫も幼虫も確認されておらず、島での絶滅が心配される。「波照間にツマベニチョウを飛ばす会」の一員として、この木を保護する取り組みを行っている。幼虫のエサとなるギョボクを守り育てて、ツマベニチョウが海を渡って来て、定着・再復活することを願っている。また、島に自生する親株の枝や子木、種子を学校の校庭や公民館、民家の庭などに植樹・播種して増やす予定である。

オレンジ色と白色の美しい翅のツマベニチョウが、1年中島内を飛び回っている姿を見たい、見せたい。



⑨ リュウキュウチシャノキ
(ブリブチ公園・慶原断層・ピテヌワー)
—石灰岩上で生育—

海岸や低地の琉球石灰岩地でたくましく育つこの樹木は、島ではブリブチ公園や慶原断層、シサバルワー、マートゥルワーの岩がゴツゴツした荒地にひっそりと生育している。断層や海岸段丘の岩場は足場が悪く、その林内をくまなく探し、年に3回しか入れないピテヌワーを調査するのは時間がかかることもあり、これまで確認した株は30に満たない。ギョボクより個体数も多く、開発が難しい場所に生育しているので絶滅の心配は大きくないが、島では希少で貴重な樹木である。竹富町特別希少野生動植物のこの樹木は、主幹の周りに数本の側幹が出ており、その幹には小さなこぶがある。また、その樹皮は淡い白色でうろこ状に剥がれているのですぐに分かる。島での樹高はせいぜい5mにも満たないが、これは台風の強風のせいであると思われる。樹冠の枝先に咲く小さな白い花は房状に集まって美しい。



⑩ オオクサボク (慶原断層)
—ウドの大木—

石垣島や西表島などで自生の報告があるが、慶原断層の薄暗い林内でごく限られた区域に数本の成木が3年前に見つかった。胸高直径が約40cm、樹高が約6mにもなる大木であるのに

もかわらず、これまで発見されなかったのは不思議で我が目を疑った。八重山では、石垣島米原ヤシ林の付近以外では見たことはなく、まさか波照間島で見られるとは予想すらしていなかった。この木は石灰岩地域の林内に生育し、幹や枝が軟らかく折れやすいので木材として役に立たないことから、別名ウドノキとも呼ばれる。材質が柔らかいせいか、写真にあるように珍しい枯れ方をした幹に年輪がはっきりと読み取られる。棒状の熟した果実は粘着性が強く、服についたら取り剥がし難い。これがどのようにして波照間島にたどり着いたのか知りたい。



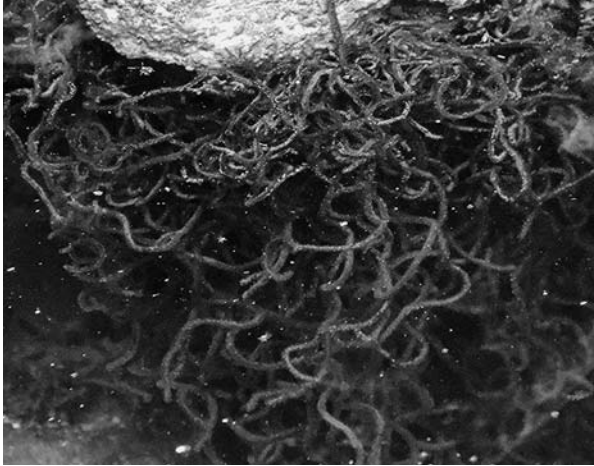
⑪ シマチスジノリ (シムスゲー)
—八重山で1箇所だけに自生—

このモズクに似た淡水産藻類は絶滅危惧I類で、沖縄本島や宮古島の石灰岩地帯から報告されていたが、八重山では初めて2011年(平成23)に古井戸・シムスゲーで発見された。

この古井戸では、水面近くの水中で壁面に着生しているが、毎年出現するわけではなくここ3年間は見られない。この藻類は数年から30数年後に再出現した例があることから、波照間島

での再出現を期待したい。

それにしても、外海の小さな島の極めて小さな井戸でよくぞ世代を継いで生き残ってきたものである。アマラ牛(赤牛)がこの古井戸の水を探り当てる前はどこにいて、どのようにしてシムスケーにたどり着いたのか疑問が尽きない。



⑫ シロバナハマゴウ(最南端の碑近辺)
—紫色から白色へ—



ハマゴウは砂浜や海岸付近の砂地で茎を地面に這わせて広がり、芳香のある青紫色の小さな美しい花を咲かせる。波照間島でもほとんど青紫花であるが、たった一箇所、「日本最南端之碑」近くの歩道に白色花のハマゴウが見られる。この白花のハマゴウは紫花のハマゴウから突然変異でできた白変種と考えられている。しかし、花が咲いていなければ見分けがつかず、葉や茎では識別ができない。波照間島だけでなく他の島々でも、白花のハマゴウは極めて少な

いと報告されている。紫花と白花が隣り合って咲いているその場所で、交雑により別の色をした新しいハマゴウができることを夢見ている。八重山では同じ仲間で、広域に見られるミツバハマゴウと西表島船浮に県指定天然記念物のヤエヤマハマゴウがある。

⑬ ヤエヤマクマガイソウ
(ピテヌワー慶原断層)

—季節により花だけ葉だけの植物—

この植物は、マートウルワーやシィサバルワー、慶原断層などの林床に局所的に小群落で見られる。葉は綺麗な丸いハート型をしており、花が咲く時には葉は見られない。地中には球茎があり、直立する長い花茎に淡い緑色の花を総状につけるが、咲いた花を見ることはなかなかできない。また、葉も花も植物体も全く見られない時期があり、この植物の生態を知らなかった時は、絶滅したのではと心配した。別名をヤエヤマヒトツボクロやアオイボクロ、ヤエヤマヒトツバランと呼ばれ、波照間島では唯一の自生ランと思われる。



⑭ ハテルマカズラ (ペムチパマ)
—砂地をはう木—

ハテルマカズラは、「ハテルマ」の名のついた名誉ある二つの植物の一つである(残りの一つは、ハテルマギリ)。これはペムチパマ(南

に向けた浜)の一部に見られる目立たない植物で、砂浜の上縁付近や浜に降り立つ道(ウダチミチ)の地表をはって伸びている。一見では草と見間違えるが、驚いたことに地表をはって広がるハマゴウと同じ蔓性の樹木である。茎から小枝が出て、葉や茎、葉柄、托葉にも毛が見られ果実が金平糖のような形をしているので、別名・ケコンペイトウグサと呼ばれている。花は、キク科のハマニガナに似た鮮やかな黄色をした小さな花である。掲載の写真は開く前の花で申し訳ないが、陽が高く昇らないと花は開かないと文献で知った。島出身者として「ハテルマ」の名に恥じないよう、これから詳しく生態を観察したい。



3. 動物

⑮ ドウクツヌマエビ(マートゥルワー) —洞窟性の長いヒゲと鮮赤色のエビ—

高那崎断層の洞窟と思われる地下水域で、2018年(平成30)にドウクツヌマエビが発見された。竹富町指定希少野生動植物に指定されているこのエビは、成体の体色が鮮やかな赤色で眼が退化しており、触角(ヒゲ)が極めて長い。

私が見たスーインのエビも高那崎のエビとよく似ている。どちらの洞窟でも潮の干満と連動して水面が上下していることから、海と繋がりがよく似た環境であることもこの推察を裏付けている。不鮮明な私の写真に代わり、食堂「あやふふあみ」の大林恭子さんの鮮明な写真を掲載することにした。

石垣島や黒島、与那国島でもこのエビの生息が報告されている。高那崎洞窟には、他にドウクツモクズガニとヘリトリオカガニが見つかり、スーインでも見られるかもしれない。大嶺高安氏によると以前細長い小魚を見たとのことで、新種発見も期待される。



⑯ カグラコウモリ (シィサバルワー・マートゥルワー) —鍾乳洞の先住人—

島の方言で大型のヤエヤマオオコウモリはカブドゥリ、小型コウモリはイシャリと呼び分けている。小型のカグラコウモリはピテヌワの洞窟に生息しており、八重山諸島の固有種で、竹富町では西表島と波照間島だけに生息する。2017年(平成29)にシィサバルワーで94頭、マートゥルワーで22頭を数えたが、その実数は把握できてない。

農地基盤整備などによる鍾乳洞や自然林の減少で個体数が激減していると思われ、絶滅が心配される。夜間に人家に入ってくる小型のコウモリもいたと私の父が古老から聞いたという

が、そのコウモリは確認されていない。



⑰ セイヨウミツバチ (シィサバルワー)
—洞窟で営巣する野生ハチ—



島ではセイヨウミツバチの養蜂が行われており、分蜂により野生化した巣が洞窟や断層の壁、海岸林内のテリハボク（ヤラブ）の樹洞などで見られる。他の島で野生化したミツバチの巣を見たことは一度も無く、波照間島の野生での営巣は大変珍しい現象である。

セイヨウミツバチは野生化しないと言われていたが、ミツバチを狩る獯猛なスズメバチがない小笠原諸島では野生化したとのことである。波照間島にはかつて、スズメバチの仲間であるツマグロスズメバチ（シィマパチィ）がいたが、現在も生息しているかどうか分からない。波照間島に毒蛇のハブはいないが、藪や林に入る時には、ミツバチの襲来に気をつけた

いといけない。

⑱ アナダコ (ニシムドリ)
—県内初記録か新種か？荒磯に棲むタコ—



島の北東や南東の荒磯、ニシムドリやブードゥー、高那などの波が打ち碎ける波食棚(台)に生息するヤダグと呼ばれる珍種のタコである。

先日、NHKの番組「ダーウィンが来た」で放映された、小笠原諸島の荒磯のアナダコを見た。波照間島の荒磯に棲むタコも、小笠原のタコと形態や生息環境がとてもよく似ている。テレビ出演した琉球大学の研究者に写真を送ったところ、沖縄県初記録のアナダコであろうとのことである。

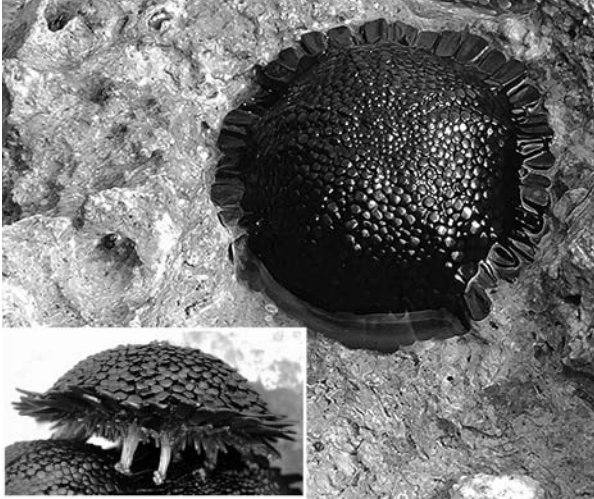
島では昔から、危険をものともしないごく限られた強者だけが、この頭腹部が大きく短足のヤダグを食用や魚釣り用エサとして捕っていた。風向きや潮時を見極め、足場が悪く波が打ち寄せる狭い波蝕棚（シャー）で、保護色をしたこのタコを見つけて捕るのは大変危険な技である。過去にはこのタコ取りに出かけて行方不明になった島人もいた。

私は数回、生餌のオオイワガニを入れたカニ籠で捕獲を試みたが、成功したのはたったの一度だけであった。また、幸運にもこのタコが棚壁でオオイワガニを押し込め込んだところを撮影することができた。今年も安全に気をつけて、捕獲や撮影、このタコの生態調査に挑戦した

い。

⑱ ジンガサウニ（ブードゥー）

—荒波にあらがヘルメット頭—



とてもウニとは思えない珍形のジンガサウニは、アナダコと同じように、荒々しく厳しい環境に生息している。荒波の打ち寄せる高那やブードゥーの波蝕棚（台）にピタリとへばりついて生きている。ジンガサウニは、荒波に流されぬよう、ウニ特有の鋭く長い棘（トゲ）を平たいタイルに変形・敷き詰めて高さのないヘルメット状に体形を変えている。この形は、天敵も避けるこのような過酷な環境に見事に適応したものと思われる。島ではポーザーウン（坊主ウニ）と呼ばれ、食用にされたという。

アナダコの捕獲や撮影ほど危なくはないが、岩から剥がし難いこのウニの採取や撮影には、打ち寄せる波の大きさや周期を確認するなど細心の注意が必要である。

ジンガサウニがいつ頃どのように生殖活動が行われ、稚ウニの岩場への定着が行われるのか知りたい。また、珊瑚礁が発達していない西表島の南西部や西部の荒磯に生息しているのかも調べてみたい。

⑳ ヤシガニ（マートウルワー）

—長い眼、白いアイシャドーと睫毛の可愛い海獣—



昔から波照間島民はヤシガニと深く関わっていた。幼少期、野山に豊かな実りが訪れる季節・梅雨明け頃を心待ちにした。日暮れにチガヤの松明とカシガー（麻袋）を持って、父の後についてヤシガニ取りに海岸林や原野、岩場などに出かけ、熟果などを求めて集まったヤシガニを捕獲した。どの家庭でも各々の猟場を持ち、何処のアダンは何時熟するか、猟場と猟時を下調べしていた。

島民は、ヤシガニが食する餌や場所、行動などによりヤシガニを呼び分けていた。芋畑を掘り起してサツマイモを食べるヤシガニ（ムゴン）をアガン（芋）ヘー（食べる）ムゴン、粟を引き倒してその穂を食するアンヘームゴン、アダンのよじ登りその熟果を食するアダンヘームゴン、リュウキュウコクタン（黒木）の高い枝先に這い上り、赤黒く熟した美味な果肉を食するキナヘームゴン、岩場の波打ち際に降りて足を踏ん張り、卵を洗い流す（放幼生行動）パリヤン（卵）アライ（洗う）ムゴンなどと呼び分けていた。

これらの作物や果実が稔る初夏から旧盆の頃まで、ほぼこの順序で島民はヤシガニを効率よく捕らえて、タンパク源として食卓を潤わせ賑わせていた。また、イン（鍾乳洞）やアブ（ド

リーネ)、岩穴などに引き籠もって(ピッキ)、雨後に水分補給に穴から出てきた大きなピッキムゴンの捕獲も、夏のシーズンを通して行われた。たまに、冬季に砂丘の林内砂地に潜って休眠(ジュンマリ)しているジュンマリムゴンを、長い棒を砂地に突き刺して探り当てて取り出した。

このようにヤシガニには、同一種であるにもかかわらず、島では7つもの呼び名がある。出世魚で有名なブリにはハマチやメジロなど10の名前があるといわれる。しかし、成長段階ではなく、生き物の生態・行動等を区別して名前をつけた例は、世界中のどの国のどの生き物にもみられないであろう。波照間島民が、いかにヤシガニの生態を熟知していたかを示す良い例である。

なぜ島の先祖はこれほどまでにヤシガニを詳しく観察していたのだろうか。珊瑚石灰岩の岩がゴロゴロして耕作地に適した土地が少なく、貧栄養の土壌で日々の食べ物・農作物の確保にも苦しんだ小さな島では、ヤシガニも貴重な食糧の一つであったのではないだろうか。私は祖母から、ワラジやタビ底にくっついた泥土を畑に戻していたと聞いた。

悲しく残念なことに近年では、この季節の風物詩・楽しい習いであったヤシガニ取りは行われていない。1960年代に始まる本格的な製糖業の農地整備事業で、田畑や原野はサトウキビ畑に変わり、芋畑や粟畑、黒木(リュウキュウコクタン)、アダン林、洞窟や岩場は、その多くが消滅してヤシガニのエサやすみかが激減した。加えて、キビを食害する野鼠駆除対策として導入されたホンDOIタチが定着して天敵となり、ヤシガニが絶滅の危機に瀕している。近年では、ヤシガニを目にする機会がほとんど無い。今では、開発されずに残っているエサと隠れ場所のあるこのような聖地(ピテヌワー)で細々と命を繋いでいるのであろう。

この写真は1年に3回しか入れないピテヌワー・マートウルワーで、夜間に木に登り地表でエサを漁っているヤシガニに接近して撮った写真である。ほとんどの人は、拡大したヤシガニの長い眼を見たことはないであろう。眼柄先端の眼の周りを白いアイシャドーが取り囲み、数本の剛毛で白い睫毛が眼の上に確認できる。なんとも可愛い怪獣ではないか。

結びに

2022年、竹富町史島々編発刊初の「増刷版」が刊行されました。多くの皆さんが波照間島に興味関心を持って購入し、増刷を強く要望したことに感謝します。執筆者をはじめ編集者、編集室職員、関係者一同はこのことを誇りに思っています。これまで読者から初版や増刷本に関する多くの質問やご指摘・要望が寄せられています。専門部会員、執筆者一同は、島の自然や歴史・文化を継続して調査・研究に精進します。これからも皆様のご指導・ご教示をよろしくお願いいたします。

1984年以降の波照間島近海におけるトビ魚漁業

波照間 純 一

波照間島近海は毎年3月になると、南から黒潮海流に乗って、産卵のためトビ魚が回遊してくる。第2次世界大戦後、島近海では糸満漁師による追い込み網により、波照間漁港を拠点にしてトビ魚漁業が行われ、トビ魚の一部が島内でも販売されたこともあった。1985年(昭和60)以降は漁具漁法の改良によって八重山漁協管内のトビ魚漁業の操業もトビロープ曳に変わってきた。島近海でのトビ魚漁業の操業は3月から5月頃まで行われた。

もともと波照間島においては、1983年(同58)頃まではトビ魚漁業はほとんど行われていない状況だった。しかし、1984年(同59)頃、石垣市内の漁業者グループ1組(川満組)が波照間島近海でトビロープ曳漁業で波照間漁港を拠点にしてトビ魚漁業操業を始め、採算の取れる漁獲量が見込まれたため、1985年度に波照間島内で民泊して本格的にトビ魚漁業操業を始めたのである。

波照間島内の漁業者グループ2組(大嶺組、保多盛組)も、1985年から本格的にトビ魚漁業の操業を開始した。1985年度の波照間島近海でのトビ魚漁獲量は108tで、波照間島漁業者グループ2組が74t(大嶺組・44t、保多盛組・30t)、石垣市内漁業者グループ1組(川満組・34t)の報告がある。

1986年(同61)には石垣市内漁業者グループ2組(金城組、与儀組)が加わり、波照間漁港を拠点にして島内で民泊しながらトビ魚漁業の操業を始めた。石垣市内漁業者グループ3組と島内漁業者グループ2組を合わせてトビ魚漁業操業グループは5組となり、波照間漁港は30名程のトビ魚漁業従事者でにぎやかだった。波照間島近海でのトビ魚漁業操業の安定化を図るため、波照間漁港を拠点にしているトビ魚漁業を操業している5組の代表から漁協に八重山漁協トビ魚生産研究会を波照間島で発足したいので漁協職員を波照間島に派遣して発足に立会ってもらいたいとの要請があったため、漁協職員(波照間参事、上原管理課長、崎原市場課長)3名を派遣した。

1987年(同62)4月27日午後6時から波照間島の富嘉部落会館で、各組の代表を含め20名程の漁業者が参加し、八重山漁協トビ魚生産研究会を発足した。トビ魚生産研究会の構成員は30名程度で役員は、会長1名、副会長5名、書記会計1名を出席者全員異議なしとのことで承認された。生産研究会はトビ魚漁業の安全操業、流通体制の整備、販売の拡大(本土市場開拓)、視察研修等の活動を行い、トビ魚漁業の安定化を図ることを目標に掲げる。役員構成は会長に金城巖(金城組代表)、副会長に金城善弘(金城組副代表)、川満安次(川満組代表)、与儀慶二(与儀組代表)、西白保和高(大嶺組副代表)、保多盛嘉一(保多盛組代表)、書記会計に大嶺高安(大嶺組代表)が就任した。

近海で漁獲されるトビ魚はヒラカマチヤー(おおなめトビ魚)、プーカー(あやトビ魚)、つまりサガマー(トビ魚)が主な魚種である。トビ魚の肉質は淡泊でクセも少ないため、大衆魚と親しまれており、本土市場でも人気のある魚で、高値で取引販売されたヒラカマチヤーは大型トビ魚(体長30cm前後)の部類に入り、本土出荷され、本土市場出荷の大部分は大型トビ魚で、小型トビ魚は加工用として安値で主に八重山漁協市場で取引販売された。

1987年度(同62)に本土市場出荷された鮮魚(マグロ、セイイカ、トビウオ)は、南西航空(日本航空)によると、191tの出荷があると報告されている。漁獲されたトビ魚は、漁場で各グループの運

搬船に積み込まれ、漁協荷捌施設に陸上げされた後、市場で大きさごとに選別されて発泡スチロール1箱に30尾詰められて本土市場に空輸され、市場でセリにかけられ取引販売される。トビ魚漁獲量は1組で1日600kg程で、潮時によっては朝、夕と2回程操業する時もある。運搬船の役割は、漁場で漁獲されたトビ魚を積み込み、漁協荷捌施設に陸揚げした後、製氷施設で氷を船倉に積み込んで波照間漁港に帰港した。そして翌日の操業に向けて港で待機した。トビ魚漁業操業が始まると、トビロープ曳網内に漁獲されたトビ魚をタモ網ですくい上げて運搬船船倉に搬入する。

波照間漁港を拠点にしてトビ魚漁業操業が本格的になると島内漁業者グループから港内に漁具修理保管施設（トビロープ曳、網等）施設が整備されていないため漁具の保管、雨天時等の漁具修理は自宅の庭先でしているのが早急に整備してもらいたいため、要望が竹富町、漁協にあるため漁協は町・県と協議し、竹富町は漁港内に1986年（同61）、1987年（同62）新沖縄県水産業構造改善特別対策事業で漁船漁業用作業保管施設（漁具倉庫）RC造り（110㎡）を整備、漁協も同年に同事業で漁船保管施設（巻上機）を整備した。

波照間漁港を拠点にした波照間島近海でのトビ魚漁業操業は1985年から2002年（平成14）までの17年間行われ、石垣市内漁業者グループのトビ魚漁業操業は1998年（平成10）頃まで行われ、波照間島内漁業者グループのトビ魚漁業操業は2002年頃まで行われている。1997年（同9）頃から小型トビ魚の漁獲が多く本土市場出荷が減少し、小型トビ魚は加工用のため安価で取引販売されるので採算がとれないため、石垣市内漁業者グループは操業をとりやめた、とのことである。島内漁業者グループのトビ魚漁業操業も2003年（同15）頃に操業を取りやめてグループを解散している。その後に八重山漁協トビ魚生産研究会も解散している

波照間島近海の海水温は1986年頃、トビ魚漁業最盛期は21℃前後で、その後海水温度の上昇もあり、トビ魚漁獲量の減少等も影響があるのではないかと島内漁業者の声も聞かれる。

◆本稿に関する主な新聞資料

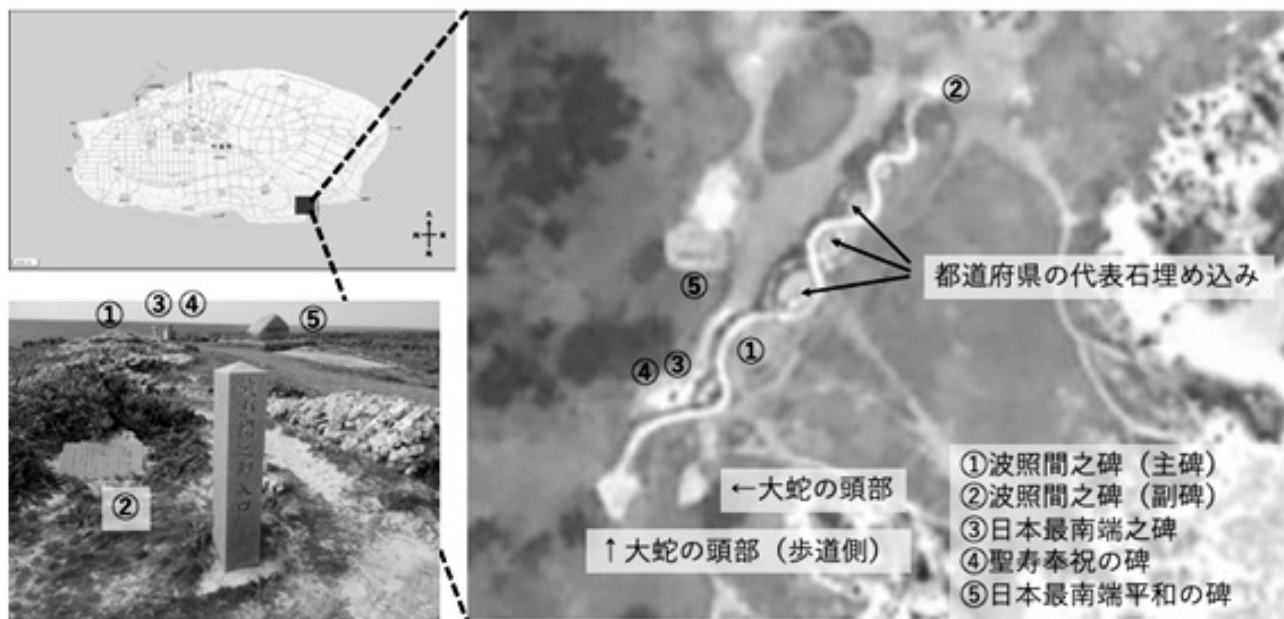
年月日	掲載紙	見出しタイトル
1986. 4. 7	八重山日報	「トビウオ漁始まる 一初夏告げる」
1986. 4. 9	八重山毎日新聞	「波照間トビウオ漁始まる」 「網を入れ追い込み漁 1日2トンの水揚げ 一下旬から最盛期に一」
1987. 2. 23	八重山毎日新聞	「波照間近海 今が漁の最盛期 飛ぶように売れるトビウオ」
1987. 5. 14	八重山日報	「トビウオ生産研が発足 販路の拡大など目指す」
1988. 10. 20	八重山毎日新聞	「62年度漁獲実績 前年度より1億円アップ 一石垣市 総水揚げは二千六百トン エビ・イカ類乱獲で減少一」
1989. 4. 14	八重山毎日新聞	「トビウオ漁最盛期に 連日の水揚げで活気 一5月まで本土市場独占一」

「波照間之碑」と象設計集団

服 部 敦

1. 日本最南端の有人島の4つの碑

日本最南端の有人島である波照間島の高那崎には四つの碑が建てられている。『竹富町史 第七巻 波照間島』（参考文献1）に「日本の最南端を発信する記念碑」として、このうち3つの碑が紹介されている。本土復帰前の1970年（昭和45）に日本縦断の旅をした一青年が建てた「日本最南端之碑」、本土復帰を記念して全国から集まった青年たちが1972年（同47）に建てた「波照間之碑」、沖縄戦終結50周年を記念して1995年（平成7）に竹富町が建てた「日本最南端平和の碑」である。もう一つは、破損した国旗掲揚塔（1977年整備）に代えて建てられた「聖寿奉祝の碑」である。



〈図1〉 波照間島高那崎の記念碑の位置（筆者作成）

2. 波照間之碑の謎

四つの碑のうち、とりわけ異彩を放つのが全長60メートルの巨大なモニュメントの中に立つ「波照間之碑」である。主碑にいたるアプローチは、2匹の大蛇がうねるように絡み合う石積みみの造りとなっており、入口に置かれた副碑には「この碑は 沖縄の祖国への復帰に際し全国の青年が各地の石を持ち寄り ここはてるまの地に精魂を注いで建設されました。この一つ一

つ石がわが国の礎となり 沖縄の新たな出発となることを念じて 昭和四十七年五月一日」と記されている。

この碑は、いったいどのような経緯で、なぜこのような形で建てられることになったのか。この造形に関わったのは誰なのか。本稿は、これらの謎に答えるための記録をまとめ、今後の保存と活用を考えることとする。



〈図2 写真〉波照間の碑（左上：主碑、右下：全国の代表石）〈参考文献(7)より〉

3. 波照間之碑の建立の経緯

波照間之碑の建立を企画したのは南方同胞援護会という法人であり、設計・建設指導を担ったのは象設計集団という建築家グループである。

南方同胞援護会は、沖縄、小笠原の本土復帰等の問題解決と同地域の同胞支援を目的に1956年（昭和31）に設置された団体（1957年以降は法律に基づく特殊法人）であり、本土復帰に伴って1973年（同48）に解散し、その役割は沖縄協会に引き継がれている。石垣市出身で、早稲田大学総長をつとめた大濱信泉が復帰前後の会長をつとめている。

象設計集団は、早稲田大学の吉阪隆正門下の大竹康市らが1971年（同46）に結成した建築家グループであり、独特の外観で知られ、日本建築学会賞を受賞した名護市庁舎の設計などで知られている。

大竹が残したメモ（参考文献5）をもとに、建設の経緯をたどってみよう。

1971年（同46）春、南方同胞援護会の吉田嗣延専務理事が全国各地の青年に対して「全国各地の石を集めて復帰記念碑をつくろう」と呼びかけたことから、この事業は始まった（参考文献（2））。

南方同胞援護会からこの企画が象設計集団に持ち込まれたのは同年9月のことである。場所は波照間島、全国の青年に呼びかけ建設奉仕隊をつくって派遣するというものであり、旅費は出るものの、設計料の出ない奉仕活動であった。

10月の現地視察（協力会社サワ・パブリックの坂田道朗が担当）を経て、建設地を高那崎に決定し、11月に大竹が設計の構想を練った。大竹のメモには、次のように記されている。

美しい環境であり、丘のシルエットを崩したくない。素人の工事だし、工期も短いことから同時にとりかかれるように地を這うようなものがよい。こんなことから二匹の蛇が絡み合う造形に決める。図面は描かないことにする。シッポからつくってゆき、体力の限界が長さを決めればよい。

象設計集団の作品集の中に、二匹の蛇は葛藤と融合を表しているという解説が残されている（参考文献（3））。

12月3日から13日間にわたって、第1期の工事が行われた。本土から東北地方の農家の青年、トラック運転手、学生など11名、沖縄本島から青年開発隊7名が参加し、大竹が沖縄本島の現場から設計・建設指導の役割で加わった。第1期工事では、砂の上に描いた図に従って、砂地を30センチほど掘り、5日間をかけて石灰岩を入れコンクリートで固めて基礎を築いた上で、8日間をかけて胴体の石積みを行った。石灰岩は畑の中の不要な石垣を崩してダンプで運び、計48台分にもなったという。

年があけて、1972年（同47）5月2日より第2期工事が行われた。本土から参加団体の代表17人、沖縄本島から7名が参加している。参加団体は、日本青年団協議会、神道青年全国協議会、友愛青年同志会、修養団青年部、日本遺族会青年部、郷友連青年部、日本奉仕協会、日本健青会、沖縄産業開発青年部と記録されている（参考文献（7））。石積みの積み直し、赤瓦やサンゴの玉石での装飾、各地から集められた石のはめ込み、主碑の設置などが行われた。石積みの積み直しについては、大竹のメモに次のように記されている。

第1期工事で積み上げた胴体はカマボコ型であったが、太陽が真上から照らすので影ができず、全体の形がぼやけてしまう。民家の石垣にならって箱形にしエッジを強調する。さらにうねりのリズム感を出すために、交差部を盛り上げる。

各都道府県からミカン箱一つずつの石が届き、蛇の交叉部に嵌め込まれた。北海道の水晶石、関東は秩父の蛇紋石、関西是那智の滝の石などの各地の代表石が集まった。代表石の一覧は確認できていない。

主碑は三角錐状の黒御影石であり、周りにはナンダラ石敷き、経路は赤瓦破片の埋め込みが施されている。

沖縄本土復帰の当日である5月15日に竣工し、同日午後2時から竣工式が行われている。復帰記念の式典を終えた島民が軽トラックに乗り合わせてぞくぞくと集まり、近くに建設された飛行場から神主10名ほどがおりたって国旗がひるがえる中で祝詞があげられたという。



〈図3 写真〉自力建設の様子〈参考文献(5)より転載〉

4. 象設計集団と沖縄

なぜ、南方同胞援護会から東京の建築家グループである象設計集団に波照間之碑建設の依頼が持ち込まれたのだろうか。

1971年（昭和46）に吉阪隆正が主宰するU研究室から独立した大竹らが象設計集団を設立した時、吉阪ははなむけとして沖縄こどもの国の仕事を贈った。コザ市での沖縄こども国の建設も、南方同胞援護会が本土復帰の記念事業として推進したものである。南方同胞援護会と吉阪との関係に明確な資料はないが、会長だった大濱信泉と吉阪の間には大学の総長、教授としての関係以上の親交があり、その関係から、象設計集団が推挙されたものと推測される。

象設計集団は1971年からこどもの国のマスタープランの策定に取り組み、1972年（同47）から1973年（同48）にかけて、こども博物館の設計監理を行った。波照間之碑の建設の企画はそ

の最中に持ち込まれたものである。

象設計集団は、市民が建築や地域の創造に直接関わる「自力建設」を重要なテーマとしていて、この企画にも関心を持った一方で、米軍基地が残存することになり賛否がある中での本土復帰を単純に祝っていいのかという疑問も感じていたという。しかし、1年以上関わってきた沖縄をもっと知りたいという欲求が強く、「行動してから考えよう」と大竹がこの仕事に飛び込んでいくことを決めたという。参加した青年たちには交流のムードが漂い、竣工式に島民が集まってきた時には「遠くはなれた青年達があつまってきた一つの仕事をやりとげたという感激でいっぱい」になったが、日の丸がひるがえる中、白装束の神主さんの祝詞があがり、一方で那覇で激しいデモがあることに思いをはせて、「重い荷物を背負ってしまった」という実感を大竹は記している。



名護市庁舎(名護市)



21世紀の森公園(名護市)



今帰仁村中央公民館(今帰仁村)



白浜公園(うるま市・旧石川市)

〈図4〉現存する沖縄県内の象設計集団の作品（筆者撮影）

波照間之碑の仕事を経て、「重い荷物を背負った」象設計集団は、その後も、沖縄で仕事を続けた。1972年（同47）から1981年（同56）までの10年間の間に恩納村、名護市、今帰仁村、石川市、沖縄市で、地域計画の策定（日本都市計画学会石川賞）に携わり、今帰仁村中央公民館（芸術選奨文部大臣新人賞）、21世紀の森公園、石川白浜原公園、名護市庁舎（日本建築学会賞）といった高い評価を得た設計作品を残している。

筆者は本土復帰後の象設計集団が沖縄で関与した一連の地域計画を再評価するための調査研

究を行っており、その一環として、波照間之碑について知り得た情報を今回まとめることとしたものである。

5. 波照間之碑の保存と活用

本土復帰から50年にあたる本年（2022年）、波照間之碑も同じ歳月を重ねている。海に近く厳しい環境下にあるため、たびたび損傷を受けていて、建設当初に参加した団体の一つである神道青年全国協議会が修復をおこなっている。団体の記録によると、2003年（平成15）に副碑の修復が、2018年（平成30）にはめ込まれた全国各地からの石及びプレートの欠損の修復が行われている。

本記念碑は、竹富町の直接の管理下にはおかれていないが、観光関連施設として担当課が目配りを行っているようである（参考文献（7））。

建設から50年近くを経る中で、沖縄本島の象設計集団の作品も保存・活用の是非や方法が議論される時期にきている。保存・活用する場合は、それぞれ単体としてだけではなく、本土復帰からの10年間という重要な時期に集中的に創造された象設計集団の一連の作品群として、文化的価値を適切に評価し、文化財として保存しつつ、観光資源などとして積極的に活用していくことが望まれる。波照間之碑についても、建設の経緯や造形の趣旨などが地域の中で共有され、地域の住民の手で守られ、活かされていくことが望まれる。この小論をきっかけに、当時の記憶、写真、資料の存在に気づかれた方がおられれば、ぜひ、町役場教育委員会にお知らせいただきたい。

〈参考文献〉

- (1) 『竹富町史 第七巻 波照間島』（竹富町、2018年）285－286頁。
- (2) 『八重山毎日新聞』1972年5月1日付。
- (3) O J 会編『大竹康市番外地講座これが建築なのだ』（T O T O 出版、1995年）196－205頁。
- (4) 「象グループ・沖縄の仕事」『建築文化』〈No.373〉（彰国社、1977年）100－101頁。
- (5) 「特集 象設計集団」『S D』〈No.254〉（鹿島出版会、1985年）168頁。
- (6) 「特集 あいまいもこ象設計集団」『建築文化』〈No.564〉（彰国社、1993年）100－101頁。
- (7) 祈願碑、神道青年全国協議会ホームページ

<https://www.shinseikyo.net/kiganhi02.php> （2022. 10. 16取得）。

「波照間文化協会」2年余の軌跡

西前津 松 市

活動は2年に過ぎなかったが、かつて「波照間文化協会」が存在した。1993年（平成5）8月設立総会時の会員は97人で、波照間島在住が33人もいたのだから、なかなかの勢いを感じさせるスタートであった。新城永佑氏は『会報 波照間文化』〈第3号〉に次のように書いた。「島に住みながら故郷・波照間の文化を理解しない者の動揺でもあったが、島に関する総合的な研究組織などが必要ではないか、と内心あったのは確かである」。

当協会発足は中鉢良護さん抜きには語れない。当時、中鉢さんは英語版『HATERUMA』（コルネリオス＝アウエハント著）の和訳を一通り終え、試訳本を親交のあった波照間関係者数人に手渡し、事実関係の確認や不適切な訳等指摘するよう声かけていた（日本語版発行は11年後の2004年9月）。そこで『HATERUMA』読み合わせの必要性が生じ、それが波照間文化協会設立に発展したのである。「活動の基本方針」に「当面『HATERUMA』や『波照間民俗誌』（宮良高弘著）の学習をする（中略）基本的に毎月第3土曜日に定例会」を持つとある。定例会は18回開催された。以下、記録を基に活動の軌跡をなぞってみた。

1. 総会・例会の記録

◆1993年（平成5年）―『波照間文化協会』設立に向けた月例会―

- 設立準備会発足（3月30日）
- 第2回月例会（4月9日）
- 第3回月例会（5月7日）
- 第4回月例会（6月11日）
- 第5回月例会（6月25日）
- 第6回月例会（7月9日）
- 第7回月例会（7月23日）

●『波照間文化協会』設立総会（8月13日〈金〉）・定例会

- 第1回定例会（9月25日）。19時30分～22時（以下略）。出席7人。

レポート：「島の地形と地質」（『HATERUMA』「第一章 島とその人々 1 島」を承け）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：島村修（顧問。以下略）・中鉢良護

* 「沖縄県波照間島の地形と地質」（河名俊男、大城逸朗）等引用。

- 第2回定例会（10月16日〈土〉）。出席12人（石垣市内11人、竹富町1人）

レポート：「波照間島や八重山諸島の気候概要」（「第一章 2 気候」を承け）

レポーター：玉城潤二

コメンテーター：島村修

○第3回定例会（11月20日〈土〉）

出席6人（市内5人，波照間島1人）

レポート：「時間の儀礼」「空間・方角の儀礼」（「第一章 3 時間・空間・方角」を承け）

レポーター：玉城功一

*十干十二支や気学、陰陽五行等解説。クルユン（繰り読み）の具体的活用例。占土師による墓所の選定、ユタの占土術的な「治療」等。

○第4回定例会（12月18日〈土〉）。

出席12人（市内8人，波照間2人，竹富2人）。

レポート：「波照間島の地下水の水質」（『HATERUMA』「第一章」に対応）

レポーター：東田盛善

コメンテーター：島村修

*自らの学術論文を基にした発表であった。波照間島の69か所の井戸の水質調査結果報告。専門的で難しい内容であったが、OHPを活用して丁寧に説明していた。竹富町議等熱心に質問していた。



〈写真〉『ぱいぬしまじま50』（竹富町、1998年）116頁より転載

◆1994年（平成6年）

○第5回定例会（1月29日〈土〉）。

レポート：「波照間島の人口推移と人口問題」（「第一章 4 人口」に対応）

レポーター：通事孝作

コメンテーター：加屋本賢光（顧問。以下略）

*『八重山島年来記』等古文書に記された人口を推移グラフ化し、分かり易く説明した。明和津波後の白保村、大浜村両村への強制移住により島内人口が3分の1に激減等、時代、世相、天災等を色濃く物語っていた。

○第6回定例会（2月19日〈土〉）。

レポート：「波照間島の言語」（「第一章 5 言語」を承け）

レポーター：新城寅生

コメンテーター：島村修

*波照間の言語には「有声音の無声音化」の特徴がある等。

○第7回定例会（3月20日〈日〉）

レポート：「波照間島に関する著書・論文」（「第一章 6 波照間に関する資料」を承け）

レポーター：通事孝作

コメンテーター 島村修

*会報1～3に「波照間関係文献目録」を掲載。

○第8回定例会（5月21日〈土〉）。出席5人（石垣市内5人）。

レポート：「フカ（外）村」（「第二章 村落 五つの村落」に対応）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：島村修

*古地図を提示し、各御嶽と各村のトゥニムトゥとの関係、村落移動、廃村跡について3回にわたって報告した。村落移動に係る阿利氏自身の研究内容も発表する（第9回～11回も同様）。

○第9回定例会（6月21日〈火〉）。出席7人。

レポート：「ナス（名石）村」（「第二章 村落 五つの村落」に対応）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：島村修

○第10回定例会（7月21日〈火〉）。出席7人（石垣市内5人、波照間1人、鳩間1人）。

レポート：「ナー（前）村」（「第二章 村落 五つの村落」に対応）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：島村修

●第2回定例総会（8月27日〈土〉）。20時～21時。竹富町役場2階ホール。

○第11回定例会（9月16日〈金〉）。出席13人（内、本土から2人）

レポート：「ニシ（北）とペー（南）村」（「第二章 村落 五つの村落」に対応）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：加屋本賢光

○第12回定例会（10月20日〈木〉）

レポート：「自治組織」（「第二章 2 自治組織」を承け）

レポーター：勝連松一

コメンテーター：島村修

*以前は部落会長が区長を兼任していたが、事務が多くなったので分離した（1979年〈昭和54〉）。

警察の駐在所設置は1924年〈大正13〉5月20日。初代巡査は當銘正端で、現駐在は43代目等。

○第13回定例会（12月15日〈木〉）。出席7人（石垣市内7人）

レポート：「屋敷と屋敷地」（「第二章「屋敷と屋敷地」を承け）

レポーター：玉城功一

コメンテーター：加屋本賢光

*生命力や繁栄を留める意味で屋敷は奥広がりがいい（墓の敷地は逆）。「一番座」は日常的にも儀礼的にも最も重要な部屋。中でも最上位は北東コーナー等。

◆1995年（平成7）

○第14回定例会（1月21日〈土〉）。出席7人（石垣市内7人）

レポート：「波照間島の屋号」（「第二章 3 屋号」を承け）

レポーター：西前津松市

コメンテーター：島村修

*「よくある語尾の長母音（一エ）は、つねに語尾の母音＋ヤーを縮めた形を表している」とか「語尾のオイは（中略）語尾のスクにヤーが結びついたときに使われる」等とあるが、違うのではないかな等。

○第15回定例会（3月16日〈水〉）

レポート：「御嶽Ⅰ」（「第二章 村落 5 御嶽」に対応）

レポーター：通事孝作

コメンテーター：加屋本賢光

*自説を発表しつつもアウエハントの視点からも説明した。以下同じ。

○第16回定例会（4月20日〈木〉）

レポート：「御嶽Ⅱ」（「第二章 村落 5 御嶽」に対応）

レポーター：通事孝作

コメンテーター：加屋本賢光

○第17回定例会（5月18日〈木〉）

レポート「御嶽①」（「第二章 村落 5 御嶽」に対応）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：加屋本賢光

*自説を発表しつつもアウエハントの視点からも説明した。以下同じ。

○第18回定例会（6月15日〈木〉）

レポート：「御嶽②」（「第二章 村落 5 御嶽」に対応）

レポーター：阿利直治

コメンテーター：島村修

○第19回定例会（8月22日〈火〉）。出席7人（その内、外国1人）

レポート：ナー村（前村）について（「第二章 村落 1 五つの村落」に対応）

レポーター：通事孝作

コメンテーター：島村修

*今回はナー村（前村）に絞る。ブスクワー（大底御嶽）、ケーシムリワーに関連させながら発表する。

●第3回定例総会（8月30日〈水〉）。20時～。石垣市立文化会館2階大ホール。

2. 『会報 波照間文化』の刊行

○第1号（1993年6月25日発行）

玉城功一氏の「『波照間文化協会』（仮称）設立準備会発足に当たって」、中鉢良護氏の「C・アウエハント著『HATERUMA』の民俗誌的意義」、通事孝作氏の「波照間島関係文献目録（1）」等掲載。

○第2号（1993年10月31日発行）

「『波照間文化協会』設立趣意書」、玉城潤二氏の「波照間島や八重山諸島の気候概要」、通事孝作氏の「波照間島関係文献目録（2）」等掲載。

○第3号（1994年5月31日発行）

通事孝作氏の「波照間島の人口動態—近世から現代まで」、中鉢良護氏の「〈波照間の稲作〉覚え書き」等掲載。

先に書いたようになかなかの勢いを感じさせる波照間文化協会のスタートであったが、2年を越えたところで活動が途絶えている。その理由を会長の玉城功一さんは、次のように語っている。

「3年目に入ったところで町や出身校の50周年、30周年など、いろいろな記念行事が重なった」とことと、「2部（『HATERUMA』）になってくると宗教関係になるものだから。宗教の分野に入ってくると（中略）分からないことがたくさんありすぎて。ここで（中略）例会を、ひと休みしようということになって、中断してしまって再開できずにいます。」

（『情報やいま』〈南山舎、2005年1／2月号〉。アウエハント静子氏との対談から）

「稲作栽培」から「サトウキビ単作」の波照間島

通 事 孝 作

はじめに

八重山諸島の南端に位置する波照間島は、かつて稲作が栽培されていたが、今では「サトウキビの島」で知られる。稲作は、琉球王府時代から広く行われ、泥岩が露出する場所はほとんど天水田として利用された。米は麦、粟、豆などと並び古くから重要な作物の一つだった。このことは、稲作に関する神事や祭事が祭祀のなかでも最も重要な位置を占めていることや、島の代表的な民謡《波照間島節》が稲作について謡っていることから知ることができる。稲作は1960年代（昭和35～40年）までは甘蔗（サトウキビ）、甘藷（サツマイモ）、小麦、粟、などと同様に行われ、雑穀類が島の生業を形成していた。これらの作物は食生活でも必需品だった。ただ、稲作の発祥については不明な点が多く、よく分からない。稲は収穫期になると、実った黄金穂の波打つ稲田の光景が見られた。しかし、1963年（昭和38）以降、天水田はサトウキビの導入により切り崩され、キビ畑に変わった。1961年（同36）には四つの小型製糖工場を統合するとともに新しい波照間製糖（株）が設立され、1963年には操業が開始した。今から60年前のことである。また、2014年（平成26）には旧工場の隣接地に新工場が完成した。

1. 稲の栽培

（1）稲作の始まりと天水田

波照間島は島全体が琉球石灰岩からなり、水資源に恵まれない、いわゆる「ヌンゲン（野国）島」である。そのため、琉球王府時代には稲作

は、降雨が頼み綱の「天水田」で行われ、雨水を大切にしていた。波照間島以外の竹富島、黒島、新城島、鳩間島なども「ヌンゲン島」である。そのため百姓は米を租税として納入するため、水が豊富な「タンゲン（田国）島」の西表島で稲作通耕を行っていた。波照間島での稲作は、古くから天水田に依存していたので、4、5年に一度しか満足に収穫が得られなかった。

波照間島を知る最も古い史料である、『李朝実録』朝鮮人漂流民の記録（1478年〈成化14〉）には島は「黍・粟・麦はあるが水田はなく、稲米は所乃（そない）島と交易して得ている」とあり、稲作の存在を否定する。だが、これに異を唱える人もいる。『HATERUMA—南琉球島嶼文化の社会と宗教—』を執筆したオランダの文化人類学者コルネリウス・アウエハントは、1478年ころ既に島の西部には水田があったが、漂流民が東部に滞在したためにそれを見ていないのではないかと推論する。いずれにせよ、文献史料における波照間島の稲作は、17世紀初頭に薩摩藩の島津氏による「慶長検地」から始まる、といわれる。

『宮古八重山両島絵図帳』（1647年）には石高の記載、田方・畠方の区別などが記される。史料の記録から石高の一割弱が水田であることが分かる。また、研究者の中には、史料には「おふか村・なしち村・たもお村・山田村・むかい村・たかす村・たはる村・野川村・ミおすく村・あかた村・平田村・なわんて村」の村名に「田」の付く地名がいくつかある。それからすると、この時期にはすでに島の中央の石灰岩台地に水田が存在し、それが検地で確認され記録として残った、と判断する人もいる（中鉢1994）。

当時は琉球王府の時代であり、八重山諸島では人頭税制が敷かれていた。

波照間島は、「ヌンゲン島」ながらも天水依存の田圃を持ち続けていた理由は、琉球王府時代の貢租が物税、すなわち粃であったので利益打算を越えて、水田耕作に従事することは、住民にとって義務であった、といわれる。1903年（明治36）に人頭税制が廃止された以後も、天水田を営々と保持し続けていたことは、住民の保守性・創造性の欠如・島嶼であるために外来文化の影響を受けることが少なかった点などが挙げられる。島の農業は、自給自足的な経済秩序を保持していたので、稲作は、甘蔗（サトウキビ）作、粟作と同様に食料補給という面が強かった。水さえあれば作付けしようという傾向があった。稲作は八重山全般では二期作であるが、波照間島では一期作であった。八重山では二期作は台風の影響などもあって一期作と比べて減少が予想されるとともに、島のほとんどが琉球石灰岩から形成されていて、保水性が乏しかった（宮良1972）。

（2）天水田の分布

波照間島の土地利用を土地台帳から見た水田の分布を大別すると、富嘉村の周辺・富嘉村と名石村・前村の三村の間、さらに北村・南村の両村周辺の水田と、島の外縁部に作られたヌーダー（野田）の水田に二分されている、と言われる。富嘉村などの集落周辺の水田は、土壌の厚さがあり、水持ちが比較的好かった。これらの水田の苗代田は、富嘉村から前村までの田圃を利用した。水田の面積は極小のものから、一反余りの大きな田圃までまとまって形成されていた。田圃の畔は、土が崩れないように石を積み、これに土を上塗りすることもあったと言われる。

一方、集落周辺ではない島の外縁部の水田であるヌーダーは、原野のなかの低くなった場所

に点在していた。ヌーダーは干ばつの影響を受けやすく、外縁部の水田は水持ちが悪いため、干ばつ時には雨水が溜まらず、3年に一度収穫できればよい水田もあった。そのため、雨水を溜めるために畔を分厚くし、水田はいつも雨水を溜め続けた。田圃には一般的な名称があり、長い田圃はナーマス、大きな田圃はブーマス、極く小さな田圃はマスタマと呼ばれていた。

（3）稲の播種と収穫・高倉

八重山の農業を知る18世紀初・中期の古文書に『諸村農業之次第』がある。この史料には稲作について、稲の植え方から収穫の時期までが詳細に記されている。史料には「苗代田は九月初め頃に鋤踏み、のち半月ごとに二度三度牛に踏ませ、十月初め頃スバル星がとくに巳の時刻に東の空にあがる時期に種子を蒔き入れる」、また「田はすべて天水田で、九月二十日頃から鋤踏み、三十五日ごとに合計三度牛に踏ませ、十二月から正月に田植え、二十日後に最初の草取り、のち二十五日ごとに合計三回の草取りをする。苗植えは植え間六～八寸で三本づつ植える」とある。しかし、史料による稲は標準的な作付けであり、天水田だけの島では年によって雨不足のため田植えが遅れることもあった。

稲は、山や川のない「ヌンゲン島」で灌漑施設のない波照間島では秋から冬にかけて降る雨を田圃に溜めて鋤で耕す。その後、4～5頭の牛・馬を連ねて水田を踏ませて苗を植え、夏の台風の襲来前に刈り取る。換言すれば、12月から翌年3月まで播種、田植え、草取りをした。6月には台風シーズンを避けて収穫ということが一般的な稲作であった。田植えは田んぼを多く抱える農家ではユイマール（共同作業）で進めた。田植え後、草取りなどをして稲刈りは5月ごろまでに終えた。波照間島の稲について「八月から十一月までに木鋤で四回、苗代田などを整地して、十二月から翌年二月までに播種を行

なう。六月から七月までには収穫する（『琉球新報』1904年9月27日付）とある。ちなみに稲の他には、粟、大麦、小麦、甘藷、苧麻、草綿、落花生も栽培されている。

稲の在来品種は、各種あったが、そのなかでよく栽培されたのが草生で風に強いボーザーマイ（メー）。この品種は芒がないため、「坊主」を意味し、「波照間坊主」あるいは「波照間在来」と呼ばれた。この稲は、他の米と比べ一か月以上も出穂までの期間が短縮された。

波照間島出身の故・仲本信幸さんの伝承によると、ボーザーマイは、明治の初めの頃に石垣島の字新川の人が、台湾まで漂流したおりに、台湾の米を持ち帰り、それを友人であった波照間島北村の東田（あがた）という人物が栽培を始めた。芒がないこの稲は、田植え後、僅か50日で収穫できた。当時の在来稲が田植えから収穫まで4カ月かかったのに比べ驚異的な早さだった。干ばつによる被害が頻繁だった波照間島の天水田に適した稲として歓迎され、瞬く間に広がった。ボーザーマイは他の島でも有名になった。しかし、収穫量が少ない、粘り気の強い米を好む八重山の嗜好に合わない、などの理由から波照間島以外には定着しなかった（安溪2007）。

稲の収穫面積は農家一戸の平均で田圃約4反、広い農家で6、7反を所有していた。収穫量は、豊作の年には一反当たり300斤、あるいは400斤の米がとれた。しかし、平均作の収穫高は、その5、6割が普通だった（加屋本1976）。稲は収穫期になると、足踏み脱穀機が導入されない時期は籾米の状態では貯蔵された。しかし、使用されるようになると、稲田のあちこちでは足踏み脱穀機がフル稼働し、子どもたちも稲刈りを手伝った。稲や雑穀類を貯蔵する施設が、高床式の木造倉の高倉（フファー）である。稲はここで保存された。構造は頑丈な橋脚が礎石の上に建って外観を形作る。屋根は茅葺きであ

る。大きさは八畳間ほどで壁に戸板があり、床の高さは約1.2メートルだった。高倉に入るには木梯子を用いた。高床の良さは、床を高くして風通しを良くし、通気性が湿気を押さえ、病虫害の侵入を防止することにあつた。

琉球列島の伝統文化である、高倉を写真とともに記述された文献史料がある。「この高倉には食糧として神聖な籾米及び穀物、その他稲藁は神事にも用いられ、また貴重な実用品として貯蔵された」とあり、さらに天女伝説を引き合いにして、「高倉は水源地信仰と稲作の神事に係り合いのある古い仕来りの建造物のように考えられる」と興味深い指摘をしている（鎌倉1982）。高倉は古い時代には、一世帯に一棟が建てられ、集落の周辺に見られた。稲作が盛んな頃には前村に近接して精米所もあり、住民の生活を支えていた。しかし、高倉は今では完全に姿を消した。農耕史学や民俗学に限らず、建築様式の変遷を知る貴重な建物である。また、農業に使われたコンクリート製の倉庫が北集落や南集落などに残っている。



穀物を貯蔵した高倉・1960年（昭和35年）
【提供：島村 修】

（4）稲作は干ばつで全滅に

波照間島の住民は、厳しい自然環境のなかで稲作を行ってきた。農業は保水力に乏しい琉球石灰岩の島ということから畑作を主に、甘蔗（サトウキビ）、甘藷（サツマイモ）、粟、小麦などが栽培され、天水田では自給用の稲作が行

われている。しかし、波照間島は1960年（昭和35）から2カ年間、干ばつのために水稲の作付けができず住民は途方に暮れた。1961年（同36）には水田耕作面積70町歩のうち、20町歩しか植付けていなかった。また、1962年（同37）には雨らしい雨が降らず、稲の穂出しもできずに植え付けた稲も枯れた。水稲は3年越しの不作である。長期干ばつのため70町歩の面積で植付けたのは1町歩だった。さらに水田が干上がって植え付け不能な状態にあった。

「波照間島は60年前（1902年〈明治35〉）に大暴風雨に襲われ、120戸あった家屋が、たった2戸しか残らなかったと言っている。60年後の今日は未曾有の干ばつに見舞われた〈海は生きている〉で一躍全国に宣伝された、この島の干ばつは、陸は死んでいるといった感じだ。5つの部落にある水田は天水田であるだけ、一区切りが10坪、あるいは5坪ぐらいのところもある。水田は亀裂して畑の土と同様、石のように硬い草の根を引き抜いてみると7寸ぐらいこちこちの土がついてくる。島の人たちはこの干害は今後の島の農業の行き方を根本から、覆したのだと言っている。島の人たちは3年に一度しか取れない天水田をサトウキビに切り替えよと、自然がわれわれに無言の教訓を与えたのだと言っており、過去の農業のあり方を大いに反省している。災害を受けて農業を根本から覆し、新しい営農法に生きんとする波照間。この気持ちこそ〈波照間〉気質というのではないか、知らされた。（『八重山タイムス』1962年7月20日）」と記す。

波照間島の干害被害について琉球政府厚生局と八重山地方庁は食糧救援に乗り出し、干害救助物資として米、メリケン粉などを配給した（『八重山タイムス』1962年9月9日付）。島を襲った異常な干ばつは稲作に壊滅的な打撃を与え、農作物は大きな被害を受け、天水田は全滅した。そして稲作は姿を消していった。また、

麦、粟、豆なども古くから水田に適しないところを開墾して耕作していたが、収穫量もそれほど多くなく、自給自足的なものであった。これらの作物も稲作と同様に姿を消した。

2. サトウキビ栽培の一本化

（1）小型製糖工場で黒糖づくり

甘蔗栽培は、1914年（大正3）に名石村の石野伊佐、富底宇戸の両人が石垣島から甘蔗を移植して始まった。1915年（同4）には両人を中心に名石村から6人、富嘉村から3人が加わってサッターグミ（砂糖組）を組織し、両人が持ってきた甘蔗の苗を植え付けた。そして、島の北側にあるスムダバル（下田原）に製糖小屋を建てて、石垣島の四カ村から砂糖製造人を雇用して製糖を始めた。さらに富嘉村、名石村、前村、東村（南村と北村）では集落単位の四つのサッターグミを組織し、四カ村から苗を購入した。

南村と北村の東村は、1922年（同11）頃に北村の北方に広がる小字・美里に美里製糖組合の製糖工場を建設して操業を開始、1933年（昭和8）9月22日には沖縄県共同製糖場設置補助認可を受けて、翌年1934年（同9）3月6日に工事を完了、県当局から補助金が交付された。その後、動力源は牛馬から焼玉エンジン、ディーゼルエンジンへと移り変わり、黒糖を生産した。1956年（同31）頃には「サッターグミ」を「製糖組合」に改称して株を出し合い、琉球銀行から融資を受けてディーゼルエンジンと圧搾機を購入した。

前村は、1953年（同28）に小字・前に前原製糖組合を組織し、1957年（同32）には琉球政府の補助を受けて、宮原式圧搾機を購入した。名石村は、1956年（同31）に小字・新原に名石製糖組合を作り、釜原式圧搾機を使用して黒糖づくり始めた。富嘉村は、1957年（同32）に小字・田原に富嘉製糖組合を作って、釜原式圧搾機を

使用して黒糖を作った。これらは島内4カ所の製糖組合により、小型製糖工場で一日に15～30トン程度の甘蔗を処理する小規模なものであった（入嵩西 1993）。これら工場は1962年（同37）まで製糖を行ない、翌年の1963年（同38）には中型製糖工場へ吸収合併された。

（2）波照間製糖株式会社の誕生

① 設立の動き

竹富町の島々では、1961年（昭和36）ごろから砂糖ブームに乗って中型製糖工場の設置をめぐる陳情合戦を繰り広げた。このなかで波照間島では陳情する前に製糖工場の設置に向けて自主的に動いた。1960年（同35）には八重山地方庁長であった仲本信幸が波照間島の区長である勝連文雄に手紙を送り、島の復興のために中型製糖工場の必要性を働きかけた。勝連は各製糖組合の代表者を集めて協議した。そこで各部落から代表2名の合計10名を選出して中型製糖工場の誘致委員会を結成し、誘致活動を展開した（入嵩西1993）。

仲本地方庁長は波照間製糖誘致委員会からの陳情を受けて、大東糖業株式会社の宮城仁四郎社長に企業誘致を依頼した。1961年（同36）2月には稲福清彦農務部長と技術員一人が波照間島へ渡って現地調査を行ない、稲福農務部長は「100t／日の黒糖工場が可能である」と報告した。これについて製糖関係者は「波照間島に中型製糖工場が実現すれば島の経済力は1961年の六倍。昔は地域経済だったが、今後は世界経済につながるの、島の経済は急テンポに発展する」と語った。

大東糖業（株）の現地調査について、仲本信幸地方庁長は「琉球政府の政府補助は、1960年は沖縄本島、1961年は宮古、1962年には八重山となっている。波照間島の場合、政府補助ができる範囲内を自主的に解決する考えである。波照間島は他に島と違い第三世紀層を珊瑚礁が取

り巻いているので地質が甘蔗（サトウキビ）には最適の土地である。工場が出来れば島の経済は今の六倍に伸長するだろう」を語った（『八重山毎日新聞』1961年2月28日付）。1961年8月16日には琉球政府糖業審議会が開かれて、波照間製糖設置を満場一致で可決、同年9月9日には含蜜糖製造（100t／日）業を許可した。また、同年12月18日には設立総会が開かれ、波照間製糖株式会社が誕生した。会社の概要は、資本金2,135万円（70,000株）、取締役社長は宮城清昌、取締役事業所長には西村正栄が就任した。取締役には宮城仁四郎、仲本信幸、大嶺薫、稲福清彦、石垣喜興、外間治男で、監査役には濱元永吉、波照間徹であった（入嵩西1993）。

②工場建設およびキビ操業

波照間製糖株式会社は1961年（昭和36）に会社組織が出来上がり、1962年（同37）には工場敷地の造成および工場建設に着手した。しかし、工場の落成が遅れ1963年（同38）3月には操業は始まらなかった。工場完成が遅れた理由は、製糖工場によると、「工場敷地の選定はもたつたこと」「干ばつのため水不足を来し、工場に支障を来したこと」「機械や建築資材の輸送に時間がかかり過ぎたこと」などを挙げている（『八重山毎日新聞』1963年3月29日付）。

製糖工場では農家のキビ作意欲を高めるため、集落の要所に「キビ作で生かして使え宝の天水田」「糖業で新しい時代の村おこし」「キビ作で灯そう島に文化の灯」などと立て看板を立てている（『八重山毎日新聞』1963年3月29日付）。その後、キビ操業を始めたことで竹富町役場は、離島経済振興へ寄与する波照間製糖工場の操業を祝うとともに激励電報を打電した（『八重山タイムス』1963年4月18日付）。

③製糖工場の落成式典は盛大

波照間島はかつて「園芸の島」と言われたが、

中型製糖工場の設置によって、キビの島へと変わった。そのため島民のキビ増産意欲は急上昇し、天水田地帯は一挙にキビ畑へと変わった。波照間の産業界を変えた中型製糖工場は、1963年4月17日に操業を始め、同年5月24日に2,272トンの原料を圧搾。製糖は一日あたり59.8トン、38日間の操業だった。黒糖製品は326トンで平均ブリックス21.6度、歩留まり14.3で終わった。ブリックスの割に歩留まりが少ないのは、キビの過熱と干ばつによってキビの汁が少なかった、とみられている(『八重山毎日新聞』1963年6月5日付)。

波照間製糖工場が完成し操業も終えたことで、1963年(昭和38)に会社関係者は製糖工場完成の新聞広告を打ち、多くの人たちに製糖工場を知らしめている。広告には「波照間島に能力100トンの製糖工場が完成した。工場はモダンな設備と優秀技術スタッフを備えた最新式黒糖工場であり、琉球糖業の発展に大いに貢献することを信じて疑いません。栄えある今日を迎えることは官民各位の御理解と御指導は申すに及ばず、全島民の皆様の絶大なる支援の賜と衷心より感謝申し上げます」(『八重山朝日新聞』1963年6月5日付)と綴られている。当時、竹富町町長だった崎田永起が波照間製糖工場の完成に祝辞を述べている。以下は、祝辞の内容。

波照間製糖株式会社の創立は1961年10月には波照間製糖設立発起会が結成され、許可申請書の提出によって町当局は町長副申を添え、政府の早急許可をお願いしたのであるが、発起人会の要望と政府当局の理解によってめでたく認可を得たのである。幸いにして大東糖業株式会社と資本提携が実を結び、住民の協力と会社役員 of 積極的協調によって、近代的設備の完備した当工場の落成を見たことはこれひとえに政府当局の指導はもちろん、大東糖業株式会社および住民各位ならびに工事責任者の協力によるものと深く感謝申し上げ、ともに喜ぶ次第である。

本町には近代的設備による中型製糖工場が波照間を含めて4カ所もある。これによって受ける住民の経済的影響は、現在はもちろんの事、将来に大きな期待がかけられている。現に小浜島ではおいては昨年の製糖に比べて約36%の増収を見ている。波照間島は本町内で経済力においては定評がある。このことは過去、現在における納税成績がはっきり示している。今や波照間製糖の設立は、波照間の農業近代化と飛躍的経済の発展を約束づけるものである。世界の砂糖異常相場によって原料代は比較的例年に類のない高値であったので、益々生産農家の飛躍的奮闘によって生産計画の目標達成に一段の努力を乞い願っている。本土における砂糖貿易自由化は必至であって、これに対処するためには従来の略奪的農業を止め、農業の機械化、協業化、栽培技術の改善など、重要な問題が山積みしていることを直視し、早急にこれを方向づける段階にあるということ認識すべきである。

われわれ、農業経営者として、その構造をいかに打ち立てるべきかということを大所高所に立ち、数字的根拠と合理性にある理論を持って農業経営に当たってもらいたいとお願いする次第である。そして、現在の砂糖高値相場に幻惑されることなく、農家も工場も役所、政府も真に一体となって合理化対策に邁進したい。なお、70年来と言われる長期干ばつの被害対策についても皆様の協力一致をお願いしたい。工場と住民の協力によって生産を高め、波照間島の経済発展に努力してくださることをお願いしたいものです(『八重山タイムス』1963年6月5日付)。

1963年には含蜜糖(黒糖)の中型工場が建設されて以来、島全体の農業は甘蔗単作栽培に切り替えられ、農業の近代化が強力に推進せられていった。その後、製糖工場は51年ぶりに生まれ変わり、2014年(平成26)には新工場が誕生した。

(3) 新しくなった波照間製糖工場

波照間製糖工場が新しく生まれ変わった。新製糖工場の落成式典および祝賀会が2014年（平成26）1月15日、同工場で行われ、波照間製糖（株）（西村憲社長）が指定管理者として同月18日から操業を始めた。新工場の日当たりの原料処理量は、これまでの100トンから130トンに増加した。祝賀会には島内の農家ら多くの関係者が新工場の完成を祝い、島の基幹産業であるサトウキビ産業の振興に決意を新たにした。

波照間製糖工場は旧工場隣接地に整備された。敷地面積8,970平方メートルに鉄骨2階建てで、延べ床面積4,814平方メートル。総事業費約26億円。工場内の各種バルブは中央制御室のコンピューターで開閉できるほか、箱詰も自動化されている。

竹富町役場の川満栄長町長（当時）は、テープカット後の式典で「波照間のサトウキビは長い間、地域経済を支えてきた。黒糖のさらなる品質アップと安定供給、安定販売で活性化できるように期待している」と式辞を述べ、工事関係者5社に感謝状を贈呈した。祝賀会では用地を提供した4氏に感謝状が贈られた。祝賀会后、東迎一博公民館長（当時）が「島の経済基盤、サトウキビ産業を支える新製糖工場が完成した。県内の含蜜糖全般にインパクトを与えるような工場になってほしい」と期待を込めた（『八重山毎日新聞』2014年1月16日付）。

波照間島の黒糖は、土壌が原料のサトウキビ栽培に適していることや、ユイマール（共同作業）による手刈り収穫のためトラッシュ（ごみ、くず）の混入が少ないことから、風味が良いとされ、市場で高い評価を得ている。

参考文献

- ・安溪遊地『西表島の農耕文化－海上の道の発見』（法政大学出版局、2007年）
- ・入嵩西正治『八重山糖業史』（ニライ社、1993年）
- ・鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）
- ・加屋本正一「波照間島の農耕と儀礼」（『八重山文化』〈第4号〉東京・八重山文化研究会、1976年）
- ・中鉢良護「〈波照間の稲作〉覚え書き」（『会報 波照間文化』〈第3号〉、1994年）
- ・宮良高弘『波照間島民族誌』（木耳社、1972年）

島の〈小さな経済〉を担った卵

古谷野 洋 子

「波照間島の鶏は空を飛んだ」という。昼間は庭や近くの畑で餌をあさり、夕方になるとフクギのねぐらに帰ったというが、このときにフクギまで飛んだのだろう。フクギまで飛べない鶏やヒヨコたちは、家の軒下などをねぐらにしていたのだろう。同島にはハブがいないので放し飼いができたというが、敵がなかったわけではない。猫やカラスに狙われた。家族が畑や田んぼに行くときは、必ず留守番として1人は家に残ったというが、鶏が家の中に入ってこないように番をする役目もあった（たくさんの鶏が入ってきて歩き回った家の中は、ひどい有様だったという）。その役割は主に家で糸を紡ぎながら留守番をしていた祖母などが担った。おそらく、鶏を狙うカラスや猫を追い払う役目も兼ねていたのだろう。

かつての波照間島では家畜の飼育が盛んで、牛、馬、山羊、豚、鶏などが飼われていた（*1）。現在、同島に鶏はいない。しかし、明治44年の『琉球新報』の記事「波照間事情」には、「鶏は一戸平均二十羽位居るから卵の産出は余程多い。（中略）卵は一個五厘しかしなが、同島人は容易に食はない。金で売り出すことが出来るからである」（*2）とある。また、卵は石垣島へ行くときの土産としても重宝された。波照間島の特産品としての卵は、竹富島の歌《いやる節》（*3）にも歌われている。

波照間島は、長い間、自給自足の島だったという。しかし、近代社会になると自給できないものがでてくる。故・勝連文雄氏（大正6年生まれ）によると、「島には店も商人もいなかった」というが、村会議員をしていた人が、学用品、ソーメン、石油（ランプ用であろう）、お

茶などを販売していたという。こういうものは鶏の卵で買った。例えば、氏が小学生の頃は（大正末頃であろう）、鉛筆1本が卵2個というふうであった。祖父が数日かけて縛った縄で学用品を買ったこともあるが、やはり卵の方が多く用いられていたという。

仮に、ある程度の多額の現金を扱う経済活動を〈大きな経済〉、少額の品物をめぐる経済活動を〈小さな経済〉と分けてみよう。もちろん、どちらも島にとっては必要な経済活動である。

税金の支払い（*4）、子供を石垣島にある中等学校へ行かせる教育費、家を瓦ぶきにする費用、カツオ船の購入などは、現金を媒介とする〈大きな経済〉であり、現金収入源としてはカツオ漁の配当、米（豊作になるとコメは売れた）やサトウキビなどの換金作物や大型家畜の販売などがあつた。

子供の学用品、ソーメンやお茶、石油などのこまごました生活必需品の売買は〈小さな経済〉であり、前述したように、同島での売買は主に卵によって行われた。

昭和10年代になり燐鉱会社ができると、賃金収入が得られるようになり、さらに外部からも多くの人々が働きにやってきた。カツオ節の好景気もあり、〈小さな経済〉における貨幣の流通も定着したものと考えられる。だが、戦後になっても、卵で酒を買ったという話を聞く。酒作りの上手な主婦のいる家に、卵と空き瓶を持って行き、酒を買ったという。現金がなかったためか、あるいは商店以外での買い物だったからだろうか。

卵は、前掲の「波照間事情」にもあるように、現金収入源でもあつた。ある高齢の女性は、「鶏

は3時頃コッコと鳴くよ。うちなんか鶏鳴くと起きるんだよ。まだ暗いさ。でも、エサやらんといかんでしょ。ごはんも作らんといかんでしょ」と当時を語る。「卵は食べて売ることまでできたから」といい、5個ずつ藁に包んで縛って売ったという。商人は、それを20個ずつまとめて100個にして、石垣に持って行って売った(*5)。(小さな経済)もまとまれば大きな金額となった。

- (* 1) 同島の家畜の飼育については、『竹富町史 第代七巻 波照間島』の「第8章 生業・産業」に記されている。
- (* 2) 『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成 I』(竹富町、1994年) 401頁参照。
- (* 3) 上勢頭亨『竹富島誌』(歌謡・芸能篇)(法政大学出版局、1979年) 参照。
- (* 4) 1903年(明治36)に人頭税が廃止されて金納になった。
- (* 5) 「卵は石垣に売れたので、商人は二重儲けだった」と勝連文雄氏はいう。

〈島々の踊り・狂言 No.9〉

イーヤル節

《イーヤル節》は、島々村々の乙女が、それぞれの愛しい人に島の特産を送り届ける内容です。テンポ良く、可愛い振りつけもついています。繰り返される囃子詞「持たちゃんどうビラマ」(お持ちしましたよ、お兄さん)、「届ちゃんどうミヤルビ」(届いたよ、お姉さん)は、男女の初々しい会話のようです。このとき舞台では、乙女から男性役に島々の特産物の授受がなされます。

上勢頭亨著『竹富島誌 歌謡・芸能篇』(1979年)収録の歌詞では、竹富島は「^{はなずみていさじ}花染手拭」、黒島は「^{あゝむるざき}粟盛酒」、「^{はな}離り」(新城島)は「^{かみ}亀ぬくんが」(亀の卵)、波照間島は「^{とうい}鳥ぬくんが」(鶏卵)、小浜島は「^{いし むち}石ぬ餅」、鳩間島は「^{はな}花ぬいか」(花イカ)、西表島古見は「^{やま}山ぬしょうが」(生姜)、「^{いりむてい}西表」(西表島祖納)は「^{まい みしゅ}米ぬ味噌」(米味噌)が特産物となっています。

また「歌は世につれ 世は歌につれ」といいますが、「^{ういばるみやらび}上原乙女ぬいーやるやー/^{まー}美味さるパイン どういーやる」の歌詞のように、近年は既存の歌にない地名が出てきたり、同じ地域でも従来とは異なる品に変えて歌ったりもします。

最近では、波照間島は「黄金ぬしいん」(モチキビ)、白浜は「ツヌマタ」(ツノマタ)、竹富島は「花ずみ手さじ」、豊原・大原は「キザ」(サトウキビ)、祖納は「黄金米」、大富は「島ヌシタティ」(醤油)、干立は「赤米ヌカシキ」、黒島は「牛ヌ赤子」、小浜島は「ちゅらさん黒糖」が特産品として歌われています。

このような歌詞の変化から、八重山の現在と過去の風景を、比べることもできそうです。乙女の持つ品の変化は時代の変遷を象徴的に物語ると同時に、竹富町各地の特産品を上手くアピールしています。

(飯田

泰彦)



第6回竹富町婦人連合会芸能大会
(提供・大原婦人会)

『竹富公民館日誌』の紹介〈抜粋〉

—日本復帰後の竹富島—

『竹富公民館日誌』には公民館活動が記されている。日誌をみると、このころの竹富島の動きと、島がいかにか島人の暮らしを考えていたかがよく分かる。

①1968（昭和43）年度の記録

4月、龕小屋の取り壊し、片付けについては、鍛冶屋小屋とともに売却すること。失対事業で道路が広がっているが、道路に組み込まれた分は、公民館で図面を引いて名義を残して欲しい。そのことを審議してもらいたい。それに対して、執行部の回答は道路になった分は本人にあたり、寄付していただくようお願いしてゆく。議会でもそのようにしている。

10月種子取祭議会。柱35本は人夫で伐ること。タル木は生産人1人3本。長さ1丈2尺。幕舎張り生産人。中老男は全員出役のこと。

11月臨時議会。NHK「ふるさとの歌祭」参加並びに出演については、仲筋村に決定。出演者10名。

②1969（昭和44）年度の記録

◇4月15日：初議会

出席者 欠席者（省略）婦人部

- ・議席に付いて顧問を上席に先輩順とする。
- ・署名委員定めの件、会議決事項は議員全員の責任であるので上席と末席から順に署名議員を館長が任命する。
- ・参議会諮問 参議会員に与那国清介、高那石吉（東）、野原安雄、上勢頭昇（西）。狩俣正三郎、宮良透（南・仲筋のこと）。
- ・公民館長決済権限は10ドル以内。参議会の決済権限は15ドルまで、参議会で決定しても議会に報告する。
- ・信用評定委員の定めの件、評定委員は2人選出し、各支会で責任をもって評定すること。
- ・貸付限度額定めの件、最高限度額は100ドルとする。それ以上の場合は議会で決定する。
- ・賦課率定めの件、各等級定めの件、生産人比率の件（省略）。

◇5月1日：幼稚園入園式を東集会所にて行う。

◇5月2日：臨時議会開催。

- ・簡易水道施設並びに井戸水使用の件。1967年度、トンナー井戸の使用願いを受けているのが今回仲筋部落の問題であるので審議する。
- ・簡易水道施設に一切を使用させること。
- ・現在の施設をそのまま使用させ、早魃の場合は人間を優先的に使用させること。
- ・旧配水管は支会で処分すること。
- ・コイン井戸は洗い水として必要であるから使用することを認める。

- ・各井戸は隣近所で必要とするならば使用しても良い。

◇5月7日：臨時議会開催。

- ・高等弁務官初巡視のこと。
- ・労働局長初来島のこと。
- ・議会議員幹部は棧橋まで出迎えのこと。
- ・接待歓迎陳情の件。
- ・棧橋延長の件。
- ・公民館建設の件。
- ・民芸館設置の件。
- ・水道敷設の問題。

四件のうち飲料水の確保について特に陳情する。簡易水道タンク設置のこと。東は大浦井戸、西は花城井戸のポンプ設置の陳情を行う。飲料水問題が解決できない場合は手押しポンプを町に陳情する。

◇6月7日：酒花賦課議会開催。

- 1、今年度の酒花賦課金は（省略）
- 2、諸行事施行上車賃使用の件。一年間使用して車賃の支払いを検討していく。
- 3、失業対策事業の実施の件。各支会で承諾を受けて施行すること（失業対策事業は国の予算で道路整備にあたる）。
- 4、国土美化表彰状の件。
 - ・各支会において集会を持ち役員が表彰状を持って回ること。
 - ・道路の美化を持続させるために毎月1日15日の清掃は特に復活させること。
 - ・農道の清掃について、毎年道路愛護デーを定めて、本年は6月15日より20日までにさきの通り実施すること。[東支会] アイヤル線、細原線。[西支会] 美佐志線、ナー線。[仲筋支会] コンドイ線、蔵元線（ヤンガー線より）。
 - ・空缶捨て場の問題。各支会で適当な場所を決めて捨てさせること。

◇6月28日：各支会周りで集会を持つ。

- ・清掃強化についての案。
- ・毎月1日、15日の清掃を強化すること。
- ・6月15日の月例会に、野原区長、勢頭公民館長は、回って表彰状を報告すること。
- ・7月1日より衛生部員は鈴を使用して掃除を徹底させること。
- ・衛生部員は清掃せぬ者は立ち会いで清掃させること。
- ・石垣の崩れや空屋敷の清掃は特に徹底させること。

◇9月5日：水問題の件で公民館議会開催。

- ・17日米軍民事部隊来島。
- ・トゥールングックに大きな水タンクを造った。
- ・高圧ポンプ三台。パイプ2,000m。タンク。

◇9月8日：水道委員会を開く。

- ・美佐志井戸のボーリングの水を町に送り水質を検査させること。

- ・東支会に水が乏しいので、西、南部落には必要量はあるので東に補給してもらいたい。
- ・西支会の状況は、赤山丘に水タンクをつくり美佐志井戸の水をくみ上げて東支会に一部送りたい。
- ・東支会状況は、旧放送台にタンクを造り、美佐志井戸、大浦井戸より吸い上げて利用する。

◇9月9日：島の水問題での代表者会議。

水は人間生活に無くてはならないものであるから町のマスタープランと一致するようにしたい。各支会が島国根性を起こさず一丸となって取り組みたい。マスタープランなら管理もやりやすいし、水不足の場合は水源開発の陳情もやりやすい。

◇10月8日：定例議会（種子取祭議会）。

石垣竹富郷友会長の大山徹氏出席し、種子取祭の奉納余興は土日にしてという提案があるが、公民館は否決して例年通りとすることを議決。幕舎張りの材料割当。幕舎張り生産人18歳～65歳まで。垂木は、1丈2尺もの3本。幕舎張りの出役は18歳～69歳まで。材料不能者は、1人50セント。幕舎張り欠の過怠金1ドルと定める。

◇12月9日：臨時議会開催。

旧竹富中学校敷地交換の件。

◇12月18日：臨時議会開催。

牛購入の件。

牛購入特別委員を各支会より3人選出する。

牛購入地区優先の件。両牧場に放牧の件。

◇1970年1月、山城善三来島。竹富島に民芸館を建設するために公民館と打ち合わせのため。観光協会から1万9,000ドル余、建物坪数45坪、予算の1割は地元負担。9割は政府補助。民芸館は町の経営になるが、竹富島が主である。敷地の選定の件はミルク奉安殿の前の広場が適している。

便所も同時に設置される。急いで陳情書を提出すること。西塘御嶽の改築の件は予算が1千ドルしかないので来年度にする。日本の観光調査官は竹富島の国立公園の指定については感触がよいので、お願いしたと話す。民宿について、便所、台所、風呂場の衛生面に注意すること。

- ・1月24日 竹富観光(株)設置問題並びに土地の売却等の件。
- ・出席者 瀬戸弘、根本精能、山森正治、崎山用祐、瀬戸淳、細原健一、新盛武雄、大山正夫、小堂達雄、前新雄三、内根原精昌、安里孫保、白保英行の石垣在郷友有志。
- ・竹富側は次の方々が出席する。高那石吉、前野長用、野原安雄、友利清徳、東里正幸、大浜多呂、高那三郎、小底朝泉、上勢頭昇
- ・双方から発起人を選任して委員が主体となって仕事をする。

◇1970年3月31日 1969年度総会。

1970年（昭和45）3月31日、観光収入は一般住民よりも喜ばれているので、収入面に取り入れてもらいたいとの決議。

③1970（昭和45）年度の記録

◇4月15日：初議会、賦課率の定め。幼稚園の予算審議（公民館は幼稚園を管理していた）。

◇4月19日：植林委員を招集する。植林をすれば補助金がもらえるので、三支会で植林する。道路の

長さ、東武佐志1,510m、アラ道610m、トムドイ線340m、加伊治線など。

◇4月28日：参議会開催。観光協会より映画撮影の依頼があり、その件。

◇5月2日：竹富幼稚園入園式。

◇5月11日：臨時議会招集する。

議題

1、公民館の建設委員（高等弁務官の配下）が調査のために来島するので敷地を決定したい。

公民館の敷地は、現在の東集会場の敷地に決定する。但し、現在の敷地が狭ければ隣地を買い取る。

2、調査団の接待の件、執行部に一任する。牛衡器の件、等。

◇6月9日：公民館祭事行事予算議会。瀬戸弘竹富町長は備船にて出席。祭事行事賦課金の件。

- ・民芸館建設に関する事、民芸館総坪数50坪、総工費4,400ドル、町役所補助金1,600ドル、地元負担金2,800ドル

◇6月9日：祭事行事予算議会。

- ・大祭4回分夜籠の時の夜食用の米代、おかず代として14ドルと決議。総予算77ドル93セントとする（予算書省略）。賦課方法（省略する）。

- ・公民館、民芸館建設の件

- ・公民館は弁務官資金で造れることになり近日中に示達がある。

- ・民芸館は政府予算でめどがついたとのこと。

- ・東港の美化の件。

- ・海岸地帯の拝所の荒らされていることの件。

- ・そのためには漁業権を獲得すること。ツノマタ、海人草の採取権を取る必要がある。種牛の購入の件。

- ・星砂の採取の件は婦人会に一任。

- ・黒木の盗伐の件。各御嶽の氏子が管理すること。ハマシタン盗伐の件、営林署の禁止木であるので禁止すること。

◇仲筋部落の動議案

- ・塵捨て場を各支会で指定すること。各支会ごとに塵捨て場を管理すること。動議案は可決する。

- ・バイク取り締りの件。交差点では警笛を鳴らして通行すること。

- ・大舩道路の案内板の補修の件。

- ・空屋敷の清掃の件。空缶・空瓶などの汚物を十分に処理すること。

◇8月中旬：敷地決定、9月中旬 辞令交付。4月～5月 工事着工、7月補助金交付。地元負担金があるので結論はまだ出せない。建物はできて品物はあるのか、働く人はいるのか、結論は出せない。

◇8月20日：臨時議会、山城善三先生銅像建設発起人選出の件。

◇9月17日：臨時議会、民芸館敷地調査の件で政府係官6人が来島するのでその対応策並びに歓迎会の件。

◇10月10日：種子取祭議会開催。

議会議員の外に、崎山用祐、瀬戸淳、宮良一雄（石垣郷友会）石川明、大山静、安里八重、仲本シズ（神司）、上間千代、西表千代、小底春（婦人会）が出席した。

- ・種子取祭の奉納余興を土日にしたいという案を沖縄西塘会長よりの公文を公民館長が読み上げた。続いて、石垣郷友会の要請意見を会長の崎山用祐氏が、奉納余興を土日にしてはという要請があった。
- ・それに対する公民館の意見は、種子取祭は伝統に従って、従来通りとすると決定。

◇10月22日：臨時議会開催

公民館の建設が認可になった。

- ・資金は次の通り、高等弁務官資金8,500ドル、町補助金500ドル。坪数36半。地元負担金5,600ドル。
- ・地元負担金の募金について。趣意書によって資金を募る。
- ・竹富の割当1,000ドル予定。
- ・石垣郷友会1,600ドル予定。
- ・沖縄郷友会3,000ドル予定。
- ・沖縄への募金募集人の派遣について。町議会議員狩俣正三郎、高那石吉、館長勢頭敏晴、上勢頭昇とする。

◇11月20日：臨時議会招集。公民館建設委員選出の件。公民館建設敷地の件。①教育委員会へ西塘御嶽前の畑は教育委員会名義であるので敷地に使用する旨の陳情書を出すこと。

◇12月4日：公民館建設委員会招集

- ・出席者、高那三郎、狩俣正三郎、高那石吉、勢頭館長、花城新松執行部。
工事中の委員は次の通りとする。
- ・会計係：花城新松、人夫係：宮良透、資材係：高那三郎、富本忠、総務係：高那石吉、狩俣正三郎、上勢頭昇。

◇12月13日：浦底家西の道路補修のため車もちのみなさんに砂運搬をしてもらうこと。

◇12月23日：水道委員を招集し井戸ポンプ故障のため話し合いを持つ。

◇12月24日：幼稚園の手洗い洗面所の作業。

◇12月27日：春期大掃除巡視18,000円受入れ。

◇12月28日：参議会開催、大山泰正氏感謝状の件で話し合いを持つ。

◇1971年（同46）3月31日 公民館定期総会。

- ・一般会計を決算書の通り承認。
- ・幼稚園収支決算の通り承認。
- ・祭事行事用酒花収支決算承認。
- ・基本金、西塘基金、牛基金、種子取祭金、牛衡器、牛生産状況などは承認。新年度の予算決算案は満場一致で可決した。新役員選出 館長に勢頭敏晴、主事・花城新松、同・稲嶺成秀。

決議事項

1、キャンプについて

- ・キャンプについては禁止することを決議。
- ・石垣瀬戸商店前にキャンプ禁止の掲示を出すこと。
- ・東港栈橋モデル標示塔のそばに掲示する。

2、風紀上のことについて

- ・裸で来島する人には注意すること。
- ・旅館民宿、目抜き通りに風紀を守るよう掲示を出すこと。
- ・小鳥、蝶などのむやみに採る者がいるので注意すること。

3、水道敷設協力について

満場一致で協力することを決議した。

4、岡部先生の詩を部落内に掲示すること。

西表大原に住む親盛長明は次のような電報を寄せた。

「故郷の土地を売るな、残せ、守れ、故郷なき民は放浪の民、断じて確保乞う」

西表代表 親盛長明

竹富公民館決議

我等竹富出身者は祖先伝来のこの美しい竹富島を何時までも守り竹富人我々の総意によって郷土の平和と繁栄を確立するを目的として復帰に備え英知を結集して一致団結を以て島の土地を守り抜く事を決議する。

1971年3月31日

竹富住民大会部落民一同

要望事項

竹富島に観光で入島される方に入島券を発行したらどうかという提案があり、実現方を考えようということになる。

④1971（昭和46）年度の記録

◇4月15日：初議会。

- ・議員の議席の指定は年配者の順と定める。
- ・参議員は各支会より、2名。
- ・信用評定委員 [東] 高那三郎、高那石吉、[西] 富本忠、野原安雄、[南] 宮良透、狩俣正三郎。
- ・署名委員 各支会より2名選出する、館長任命。
- ・豚屠殺料1ドル、牛屠殺料1.5ドル、株式会社30ドル、牧野組合25ドル、内盛2ドル、生盛2ドル。
- ・観光収入の件 船10ドル、旅館5ドル、上勢頭亭10ドル、民宿2ドル、車（その他）50ドル。
- ・西塘御嶽清掃について 清掃年間12ドル。

議題

- ・生産人調べ、賦課率の確定。
- ・蔵元跡地の美化について。等。

◇5月1日：幼稚園の半窓入り口の工事を行う。

◇5月3日：東金城敬一氏宅で喜友名英文先生の「潮がれ浜」詩碑の件で話し合いを持つ。

◇5月4日：富田計介氏より故母の香典返しを受け入れる。

◇5月10日：高嶺三男氏より故父の香典返しを受け入れる。

◇5月15日：朝起き作業で大舩道路の清掃を行う。天理教信者で山城善三胸像周辺の清掃を行う。

◇5月16日：午後2時から臨時議会を持つ。山城先生の胸像建設に関して公民館にて除幕式、祝賀会

について。地ならし作業について。

- ◇ 5月17日：山城先生胸像周辺の清掃、石垣積みの作業を行う。大山泰正73歳の古希祝いのお礼として2万円受入れ。
- ◇ 5月18日：旗がしら3本立てて山城先生胸像除幕式並びに祝賀会を盛大に開催する。
- ◇ 5月21日：館長宅にて沖縄県市町村議長の接待の件で話し合いをもつ。
- ◇ 5月22日：公民館で沖縄県市町村議会が開催され婦人会が余興などで接待する。
- ◇ 5月29日：大舩道路の補修を行う。
- ◇ 5月30日：学校西道路の補修作業を行う。
- ◇ 6月1日：西塘前道路をコンクリートで補修。
- ◇ 6月4日：ダニ駆除について役所より2人来島され説明を受ける。
- ◇ 6月6日：山城先生夫人古希祝の記念としてデイゴの木本寄贈があり、3日間で植え付ける。
- ◇ 6月9日：小坂総務長官来島、部落民総出で歓迎会を持つ。
- ◇ 6月16日：薬剤散布のため生産人参加する。
- ◇ 6月17日：へりにて薬剤を散布する。
- ◇ 6月23日：慰霊祭に参加する。
- ◇ 6月24日：臨時議会開催。
- ◇ 6月25日：へりにより薬剤散布。
- ◇ 6月27日：幼稚園のトゥマヤ張り。
- ◇ 7月8日：トゥンナカーのポンプ据え付ける。
- ◇ 7月11日：へりによりダニ駆除の散布実施。
- ◇ 7月14日：種子取祭の件で石垣郷友会の代表者と話し合いを持つ。結論は前年と同じ。

[編者注]『竹富町史 第二巻 竹富島』掲載の「公民館日誌」(286～291頁)には著しい錯簡・乱丁があり、甚だしい錯誤が認められるので編者(狩俣恵一)の責任において修正を加えた。

西表開発に関する収集資料

川 平 成 雄

西表島の開発計画は、1930年（昭和5年）当時の日本政府農林次官・砂田重政を中心とした、熊本営林署による調査が嚆矢となった。その後、この開発計画はマラリアの脅威などが要因となり、計画を断念せざるをえなかった。しかし、アジア・太平洋戦争後の1959年（昭和34年）、高岡大輔の「西表島の総合開発と農業センターの建設」、いわゆる「高岡構想」の発表以来、米国民政府の関心と呼ぶと同時に、西表島開発は注目されるようになった。そして、日米両政府による調査が開始され、のちに琉球政府も参加したが、結局、西表島開発は構想だおれに終わった。

西表島開発について、私は2018年（平成30）2月18日に開催された「第253回 沖縄・八重山文化研究会」（於：沖縄県立芸術大学）で、「〈幻〉の西表島開発」と題して研究発表を行ない、その後以下の論文を発表した。

- ・「西表島開発は、なぜ〈幻〉に終わったのか」（竹富町史編集委員会『竹富町史 第十一巻 資料編』（新聞集成Ⅶ）竹富町教育委員会、2019年）1037-1076頁。
- ・「〈幻〉の西表島開発」（『沖縄文化—沖縄文化協会創設七〇周年記念誌—』沖縄文化編集所、2020年）152-173頁。

本稿はこのとき収集した資料の広い活用を期待し、竹富町教育委員会社会文化課町史編集係に原本のコピーを一式寄贈した資料を目録化したものである。

収集資料を便宜的に「1 新聞資料」（掲載記事、社説、投稿文など）と、「2 一般資料」（報告書、論文、資料、その他）に分類した。

「1 新聞資料」について、西表島開発に関する新聞記事は、『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成』シリーズの既刊書から地元紙の掲載記事を拾うこともできるが、ここではこれらに沖縄島で刊行されている『沖縄タイムス』『琉球新報』をはじめ、本土の『東京新聞』を加えた。このことにより複眼的に西表島開発の計画や、その経過を知ることができる。記事に『沖縄タイムス』が多いのは、当時の新聞社の姿勢や、関心の度合いが表れているように思料する。

1 新聞資料

新聞資料については、紙面の大見出しを中心に拾い、「見出し」欄に記した。「掲載年・月・日」が同日の場合、掲載紙名の五十音順に記すことにする。「掲載紙」の夕刊は、新聞紙名の次に〔夕〕と表わして付すことにする。「見出し」欄は1項目と考えられるものを「」で括った。「」のなかは、なるべく文意が通るように、見出しの順番を並べ替えたところがある。

掲載年・月・日	掲載紙	見出し
1959・6・30	八重山毎日新聞	「〈社説〉「西表は日本の宝庫」 国立農事試験場設置の視察に高岡氏が来島」
1959・7・2	八重山毎日新聞	「西表開発は島づくりから 国立農事研究所設置で視察の高岡氏が語る」
1959・7・20	八重山毎日新聞	「農業センターの設置は西表開発の前提となる」 「高岡氏が在京沖縄県人会で構想報告」
1959・10・9	沖縄タイムス	「西表の資源詳しく調査 積極的な開発進める すでに資金も計上 一正当なルートによる他からの援助拒まない— ア民政官記者会見」
1959・10・21	八重山毎日新聞	「『積極的に賛成』 西表農業センター設立で南方同胞会の高岡氏が東大熱研に諮問」
1959・10・24	沖縄タイムス	「西表島の産業開発へ 鉱物・森林資源も豊富 放置された五千町歩の可耕地」 「民政府が大掛りな計画 基礎調査、ほとんど成る」 「農業開発の勧告期待 本土政府の協力要請 —ブ弁務官が書簡送る—」
1959・10・25	沖縄タイムス	「社説 西表開発に本土政府の積極援助を」
1959・11・24	八重山毎日新聞	「西表開発期成会きょう結成 張り切る竹富町議会」
1960・1・1	沖縄タイムス	「西表島に希望の夜明け—具体化する総合開発—」 「日本側 日米琉のタイアップで 新春から本格化の動き」 「地元側 まず人間を入れること「現地の意見も取上げて」 「アメリカ側道路など基本施設に 民政府が十万ドル支出」 「いまは悪夢のマラリア禍 資源豊かな宝島の横顔」 「琉球側 受入態勢を整える 竹富町と足並みそろえ」 「まず農業センターを構想から実行の段階へ 高岡氏の話」
1960・1・7	沖縄タイムス	「西表開発でけさ日米共同声明 —日本側は農業部門を担当— 調査団は来月出発」
1960・1・7	琉球新報〔夕〕	「西表の総合開発 日米両国が共同声明」 「米側が基本施設を担当日本は農業開発に重点」 「福田総務長官米国へ 施政権返還を強く要望」 「二ヵ月間現地調査 林教授ら調査団一行」
1960・1・8	琉球新報	「社説 西表総合開発と受入れ体制」
1960・1・9	沖縄タイムス	「社説 西表開発調査の日米共同声明」
1960・1・9	沖縄タイムス	「西表開発に全力 —ア民政官テレビ放送— 経済発展に役立つ」
1960・1・11	琉球新報〔夕〕	「西表開発調査団長 林博士が抱負を語る」 「西表に適した作物を何ごとも現地を踏んでから」
1960・1・12	沖縄タイムス	「西表の経済開発計画」 「民政府調査明細を発表 調査は三月末で完了琉大教授（8人）も共同調査に参加20年以内に五万人を移住」
1960・1・12	琉球新報	「西表調査の具体案発表 二月一日から二ヵ月間 米、調査費に十万ドルを計上」
1960・2・8	東京新聞	「脚光浴びる西表島開発—南海の宝庫を現地に探る—」 「日米協力へ道ひらく悲願かける沖縄全住民」 「実った高岡構想 米の支援で軌道」 「有望な水力発電良質炭も豊富に」
1960・2・9	沖縄タイムス	「政府は本腰を入れよ 西表開発、東京新聞が強調」

1960・2・9	沖縄タイムス	「西表開発に望む 田中長三郎氏」「開発計画」こそ重要 企業作物の導入を考えよ」
1960・2・10	沖縄タイムス	「西表開発に望む 三浦伊八郎氏」「台風対策を怠るな 灌漑施設にも配慮を」
1960・2・11	沖縄タイムス	「西表開発にのぞむ 玉城徳蔵」「農本主義は時代遅れ アルミニウム工業を提案」
1960・2・12	沖縄タイムス	「西表開発にのぞむ 岡田彌一郎」「基礎調査を徹底的に 将来に備え資料保存も」
1960・2・23	沖縄タイムス	「まだある未踏の山 マラリアから島民を救った「キナの木」20米余もそびえる大木」
1960・3・1	沖縄タイムス	「40人が大挙現地へ 西表調査団きょう出発」
1960・3・1	沖縄タイムス〔夕〕	「眠れる「宝の島」にメス 西表調査団けさ出発」「全力をつくす覚悟」副主席の激励に答える」
1960・3・2	沖縄タイムス	「西表調査団歓迎 喜びにわく石垣飛行場」「思ったより大きい島」林団長西表上空一巡した初印象 のぼり13本数百人が出迎え」
1960・3・3	沖縄タイムス	「十條製紙 西表へ進出 一岩崎産業と提携 パルプ原料を伐採」
1960・3・6	沖縄タイムス	「調査団 西表島に第一歩」「さっそく調査開始 徒歩で第一キャンプへ」「調査団の日程」
1960・3・8	沖縄タイムス〔夕〕	「西表調査団 開発可能地は多い 立派な農業ができる」
1960・3・10	沖縄タイムス	「西表島 数百町歩が田畑になる」「開発に約三千万ドル 調査団連日ジャングルと戦う」
1960・3・11	沖縄タイムス	「西表調査団五日間の成果 可耕地思ったより広い 農業開発だけではダメ」「地元民がねぎらう 一久しぶりビールで喉をうるおす」
1960・3・13	沖縄タイムス	「日曜特集 西表調査団第一週のまとめ 開墾千町歩は優に可能」「全員元気で山野に挑む」「家族の便りを喜ぶ 一調査団キャンプゴシップ」
1960・3・15	沖縄タイムス	「社説 有望になってきた西表の開発調査」
1960・3・16	沖縄タイムス	「西表調査団 猪を生捕り舌つづみ 昼寝する大ウナギ」
1960・3・19	沖縄タイムス	「西表島開発調査 山間にも開拓可能地 パルプ資源が90% 浦内川にダム、山中トンネルで貫通 広大なマングローブを干拓」
1960・3・19	沖縄タイムス〔夕〕	「西表を大水田地帯に 「沖縄の米倉」と太鼓判 海中にも道路、思い切った構想」
1960・3・24	沖縄タイムス	「開拓精神の発揚を要望 膨大な資金要る ア民政管 西表開発地を視察」
1960・3・30	沖縄タイムス〔夕〕	「ヤマを越した西表調査団」「徒歩で難コース突破 総しあげに意気込む」
1960・3・31	沖縄タイムス〔夕〕	「ニュース物語 開発にとっ組む20年 大原部落建設の功労者西大舩さん 山越え道案内した男」
1960・4・1	八重山毎日新聞	「社説 西表開発調査団を送る」
1960・4・3	沖縄タイムス	「西表調査総仕上げ段階へ 現地慰問の大田主席きのう帰任 調査の概要近くまとまる」
1960・4・4	沖縄タイムス	「社説 西表島の開発調査とその政治的意義」

1960・4・7	沖縄タイムス〔夕〕	「西表調査団 林団長ら全員無事」「クイラ川上流に不時着 けさ米軍搜索機が発見」「空中調査は続ける」 空腹ながらも全員元気「不安の一夜を過ごす 民政府・南連が深夜まで対策」「遭難第一報警本に 無線室、刻々情報追う」「現代版久松五勇士船で石垣島に渡り連絡」「安全な場所に不時着」
1960・4・7	琉球新報〔夕〕	「林団長らヘリコプター遭難」「全員無事を確認 けさ西表島西部牧場に不時着」「救援隊 食料と水を投下」「全員健在に歓声 一時は憂色に包まれた留守部隊」「上空から機体発見 西平局長から主席に 無電報告」「無事でよかった」「一睡もしない大田主席」「不時着現場に白い煙一搜索隊上空から信号発見一」「遭難17時間後に判明 活躍した警察局無線電話」「元気で基地に帰る」
1960・4・8	沖縄タイムス	「冗談とばす林団長 「下界は騒いだそうですね」「ほっとした南連事務所」「十日に引き揚げ 調査終わる」「東京でも大騒ぎ タイムス支社に問い合わせが殺到」「現地のもよう語る 泉次長西表から帰覇」
1960・4・8	琉球新報	「社説 事故は未然に防げる」
1960・4・9	琉球新報	「あの時はこうだった 不時着パイロットの話」「不安、スリルの16時間調査団員は沈着そのもの」
1960・4・10	琉球新報	「成果あげた西表島調査 貧乏沖縄から脱皮 パラダイスの夢ふくらむ」「豊富な水資源を利用 計画にダム、水力発電も」「二千町歩を開田 二期作で米産地に」
1960・4・11	沖縄タイムス	「西表の調査おわる 団員42人きのう石垣へ」
1960・4・11	琉球新報	「社説 西表調査団の遭難と臨機応変の措置」
1960・4・12	沖縄タイムス	「西表調査団 最後のまとめに入る 国有林五割は払い下げを」
1960・4・13	沖縄タイムス	林四郎「西表島調査を終わって 理想的亜熱帯農業が可能 ―ヘリコプター事故、心配かけ恐縮― 運輸・発電開発の並進を望む」
1960・4・16	沖縄タイムス	「西表調査団きょう那覇へ 軍・民両政府に中間報告」
1960・4・16	八重山毎日新聞	「ごくろうさま 調査団きょう那覇へ」「西表開発は長期計画 農民の心構えが大事」「基本施設は入植と並行」
1960・4・17	沖縄タイムス	「西表調査団きのう那覇へ 農業用地16地区を決定」「あす政府へ中間報告 資料まとめに二か月要す」
1960・4・18	沖縄タイムス	「社説 西表調査の結果に期待する」
1960・4・18	琉球新報	「社説 西表開発の推進体制」
1960・4・19	沖縄タイムス	「西表開発、新しい生産の場に 調査団、主席に中間報告」「入植は施設完備後に 西表島 二千九百町歩を越す」「ダム・用排水 総合開発の第一歩」「地下水は豊かではない」「防風林は琉球松がよい」
1960・4・19	沖縄タイムス	「西表島調査を終えて 調査団座談会」「ぐっと広がる面積 教科書も書きかえなくては」「年間十億円台の収益が―投資しても損にならない―」「思い切ってたてた 防風防潮林の計画」「甘藷作は粗放の典型 亜熱帯農業はガラガラになりがち 総合開発計画も並進して」「緑肥にあらす木肥 新しい施設と投資が必要 低水準地帯で考慮すべき」

1960・4・19	琉球新報	「西表調査団 調査結果を主席に報告 可耕地一万三千ヘクタール 基本施設作ってから入植を」
1960・4・19		「記者席 調査団報告に耳の痛い政府」
1960・4・19	琉球新報	小湾喜長「〈私の意見〉西表開発について 農業移民を毎年送り出せ」
1960・4・20	沖縄タイムス	「西表島調査を終えて 調査団座談会 泣き笑いキャンプの思い出」「調査より綿密な踏査を 人は環境でどうにもなる…」「感じのよい浦内川 琉球のアマゾンと自称」「すばらしい風景 黒部の溪谷とみまごう」「早足に案内人も驚く 好条件に恵まれた日程」「ヘリコプター不時着の瞬間にも 貝殻のことを思う 一奥さんのおみやげに貝殻」「石垣」が都にみえた… 短靴で山越えの記録たてる」
1960・4・20	沖縄タイムス	「社説 西表調査団の中間報告について…」
1960・4・23	沖縄タイムス	「西表調査団 西表は有望な土地 「開発まで島の保護を」 きょう林団長ら四氏帰日」
1960・4・23	沖縄タイムス	「調査団帰京 西表に1000ドル農家を」「年に八万石収穫可能 農業開発に有利な条件 ひき続き第二次調査団派遣検討」
1960・4・27	沖縄タイムス	「西表調査団、政府に報告 農業移民二万人受け入れ 総合開発の一環として」
1960・10・23	沖縄タイムス	「日曜特集 西表開発調査の報告書から」「経費6,519万ドルと算定 面積2163ヘクタールふえる」「年間四作も実現可能 園芸作物は加工が有利」
1960・10・24	沖縄タイムス	「西表開発調査の報告書から 四千二百戸が定着 入植は基本施設整備後に」「草地および畜産」「部落移住ならびに営農」
1960・11・5	沖縄タイムス	「西表島の調査報告 きょう米大使館通じ提出」
1960・11・28	八重山毎日新聞	「きょう小平長官来島 一キ弁務官の案内で一 西表やパインを見る」「早急に総合計画を 西表第二次調査団 民政府へ中間報告書」
1960・12・15	沖縄タイムス	林四郎「西表の農業開発―豊富な水資源と森林資源―〈上〉
1960・12・16	沖縄タイムス	林四郎「西表の農業開発―豊富な水資源と森林資源―〈中〉
1960・12・17	沖縄タイムス	林四郎「西表の農業開発―開発は合理的な計画立てて―〈下〉
1961・3・8	八重山毎日新聞	「地方庁 竹富町長と西表開発調査で来島の高岡氏の受け入れて会議」
1961・3・31	八重山毎日新聞	「きょう現地西表へ きょうは黒島の造林視察」
1961・3・31	八重山毎日新聞	「〈きぼてん〉竹富町の本原助役・西表調査団や高岡氏の来島で服装を新調」
1961・6・9	八重山毎日新聞	「自民党沖縄対策委員会は高岡大輔氏の西表調査結果の報告を聞く」
1961・11・27	沖縄タイムス	「西表第二次調査団 民政府へ中間報告書」「速やかに総合計画を 地下資源の開発も可能 十八項目の勧告」
1961・11・28	沖縄タイムス	「社説 小平総務長官来島の意義」
1961・11・28	八重山毎日新聞	「社説 期待される小平総務長官の西表視察」
1961・11・29	八重山毎日新聞	「小平総務長官が指摘 漫然とした合理化計画 パイン自由化めぐり懇談 西表島も空から視察」
1961・11・30	沖縄タイムス	「小平長官、キャラウェイ高等弁務官と会談 援助問題、米側の意向を打診」「弁務官回答 十日までの回答 効果的な面へ配慮」「まず目標定めて 西表開発で意見一致」

1961・11・30	八重山毎日新聞	「小平総務長官ら帰日」 「町ぐるみの歓送迎に感激 視察目的十分果す 今後の施政に反映」
1961・11・30	八重山毎日新聞	「社説 小平総務長官を送る」
1961・12・3	八重山毎日新聞	「小平総務長官率直に批判 米は沖縄を理解していない 西表開発の目標あいまい」
1962・2・16	八重山毎日新聞	「西表の資源開発へ 西表産業株式会社発足」
1962・2・16	八重山毎日新聞	「西表産業開発株式会社 発起御挨拶」 (広告)
1962・7・28	八重山毎日新聞	「御挨拶」 (西表産業開発株式会社広告)
1963・7・30	八重山毎日新聞	「元議員・高岡さんの来島日程届く 西表構想瀬ぶみへ」
1963・8・3	八重山毎日新聞	「希少価値の産業考えよ 高岡構想の高岡氏が来島 竹富町役員に「西表開発」説く」
1966・6・21	八重山毎日新聞	「西表島開発 力強く推進協発足 胎動して一年ぶりに」
1967・2・24	八重山毎日新聞	「その後どうなった(4) 西表島開発推進協 一結成して八カ月に 予算なく行き詰り状態一」
1967・4・11	沖縄タイムス	「西表島の総合開発へ 農林局調査団たつ 農地、畜産など各専門分野」
1967・4・12	琉球新報	「農林局 西表へ調査団派遣 「理想的農業」を計画」
1967・5・28	八重山毎日新聞	「西表開発推進協開く一予算も増額一 精油会社の誘致を満場一致」
1967・7・7	八重山毎日新聞	「ガルフ社幹部来島 土質、石質の調査で きょう西表へ向う予定 一町と西表開発推進協が出迎え一」
1968・6・1	八重山毎日新聞	「沖縄経済開発研究所 一行四十人が八日に来島 西表島の経済視察団 「入植開発」でなく「企業導入」
1968・06・12	八重山毎日新聞	「西表島 復帰前提の開発を 沖縄の自立経済確立へ 農業移民でなく工業 竹富町 経済研究所へ協力要請」
1968・6・13	八重山毎日新聞	「社説 西表開発は国土開発策で」
1969・3・31	八重山毎日新聞	「西表島 製紙会社の借地権で計画に支障 畜産振興に暗いかげ 大規模な牧場計画に待った」
1969・7・4	八重山毎日新聞	「弘津総務副長官が記者会見 西表開発は明るい」
1969・11・23	八重山毎日新聞	「八重殖産が西表島開発計画 百十六万ドルの事業」
1970・8・11	沖縄タイムス	「西表島の総合開発計画成る 半分自然保護林に 29%は地域開発地に指定」
1970・8・11	琉球新報	「農林局 西表官有林の経営方針まとめる 自然保護46%に 残りは産業、開発用地」
1970・8・19	八重山毎日新聞	「きょう西表で住民大会 自然保護に反対、開発促進」
1970・10・6	沖縄タイムス	「西表調査団が来沖 一黒田団長 世界有数の自然保護環境一」
1970・10・22	八重山毎日新聞	「西表開発の美名で 利権屋の犠牲になる浦内」
1971・6・18	八重山毎日新聞	「瀬戸町長 一般質問で答弁 西表開発 今年中に結論」
2018・5・2	八重山毎日新聞	川平成雄「沖縄・八重山文化研究会第252回研究発表会〈Ⅱ〉の西表島開発」

2 一般資料 一報告書、論文、資料、その他一

- 1949年 ・ 森勇「西表開発問題に就いて」〈1〉(『新世代』〈第1巻第2号〉八重山教育会) 9-13頁
・ 葦間冽「琉球の心臓西表はうなる」〈1〉(『新世代』〈第1巻第2号〉八重山教育会) 29-32頁
・ 森勇「西表開発問題に就いて」〈2〉(『新世代』〈第1巻第3号〉八重山教育会) 8-11頁
・ 葦間冽「琉球の心臓西表はうなる」〈2〉(『新世代』〈第1巻第3号〉八重山教育会) 17-21頁
- 1957年 ・ 高岡大輔「沖縄問題の焦点一視察の旅より帰って…」(吉田嗣延編『季刊 沖縄と小笠原』〈創刊号〉南方同胞援護会) 6-10頁
- 1958年 ・ 高岡大輔「沖縄の存在価値を改めて懇える」(吉田嗣延編『季刊 沖縄と小笠原』〈第6号〉南方同胞援護会、1958年) 17-21頁
- 1959年 ・ 高岡大輔「西表島の総合開発と農業センターの建設」(吉田嗣延編『季刊 沖縄と小笠原』〈第10号〉南方同胞援護会、1959年) 6-11頁
- 1960年 ・ 「特集・開発をまつ西表」『今日の琉球』〈第4巻第2号一通巻第28号一〉(琉球列島米国民政府渉外報道局出版課) 4-8頁。
→内訳／喜久川宏「西表開発は如何に進められるべきか」(4-5頁)、「アンドリック民政官 調査内容を発表 合同調査は二月から」(5-7頁)、佐久本嘉庸「開拓をまつ浴野一西表開発調査に旅して一」
・ 「琉球列島高等弁務官 ドナルド・P・ブース中将のメッセージ」(沖縄県議会事務局編『沖縄県議会史』〈第17巻資料編14立法院I〉沖縄県議会) 922-936頁
・ 「西表島の開発に着目」(84-85頁)、「日本政府に西表開発援助を依頼」(85-86頁)、「西表島調査に関する具体案」(86-88頁)、「西表島調査いよいよ始まる」(88-89頁)『米国の沖縄管理の方向』〈その2〉(南方同胞援護会)
・ 宮城新昌「ブース高等弁務官メッセージと西表島開発計画に寄す」(『みどり』〈第2号〉琉球政府経済局林務課) 7-10頁
・ 宮城新昌「西表方式と森林資源の使命」(『みどり』〈第3号〉琉球政府経済局林務課) 7-8頁
・ 林四郎「西表島の農業開発について」(吉田嗣延編『季刊 沖縄と小笠原』〈第14号〉南方同胞援護会) 22-28、33頁
・ 中地宏「「眠れる宝庫」西表島一米調査団に従って一」(吉田嗣延編『季刊 沖縄と小笠原』〈第14号〉南方同胞援護会) 28-33頁
・ 『西表島農業調査報告書(詳説)』〈第3編・第4編〉(総理府特別地域連絡局)
・ 『西表島農業調査報告書(概説)』(総理府特別地域連絡局)
・ 井上由扶「西表総合開発について一主として林業開発一」(『みどり』〈第4号〉琉球政府経済局林務課) 1-11頁
・ 『西表島の資源及び経済の潜在力に関する調査報告』(スタンフォード研究所)

- ・「西表島の資源及び経済の潜在力に関する調査報告（抄）スタンフォード研究所 沖縄県議会図書室所蔵」（三木健『西表炭坑概史』三木健、1976年）170-191頁
- ・高岡大輔「西表島開発に当り 再び農業センターの建設を期す」（吉田嗣延編『季刊 沖縄と小笠原』〈第16号〉南方同胞援護会、1961年）17-22頁。
- ・1961・7・00 井上由扶「西表島第二次農業調査 1 開発調査の構想と問題点」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）1-2頁
- ・竹原秀雄「西表島第二次農業調査 2 西表調査団の一員として再び渡琉して—沖縄林業発展のために—」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）3-5頁
- ・松下規矩「西表島第二次農業調査 3 西表島の造林について」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）6-8頁
- 1961年
 - ・古在由邦「西表島第二次農業調査 4 西表島開発と道路」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）9-10頁
 - ・檜山徳治「西表島第二次農業調査 5 西表島の防風林配置計画をめぐって」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）11-13頁
 - ・多和田真淳・外間現誠「西表島第二次農業調査 6 西表島入植地の植生調査を終えて」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）14-15頁
 - ・高良鉄夫「西表島第二次農業調査 7 西表島の害虫相」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）16-19頁
 - ・赤迫龍太「西表島事業（伐採・造林）開始について」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）20-24頁
 - ・大嶺永夫「西表島と移住事業」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）33-35頁
 - ・天野鉄夫「西表官有林管理方針について」（『みどり』〈第9号〉琉球政府経済局林務課）35-36頁
 - ・『西表島第二次農業調査報告書』（総理府特別地域連絡局）
- 1962年
 - ・「西表島総合開発調査の概要」（調査部／能勢・渡辺『琉球産業調査』）184-185頁
 - ・能勢・渡辺『琉球産業調査』（調査部）
 - ・「足ぶむ西表開発構想—米・琉・日政府の政策からみる—」（金城五郎編『沖縄公論』〈通巻第6号〉沖縄公論社）50-53頁。
 - ・泉有平「西表島の農業資源開発に託する希望」（吉田嗣延『季刊 南と北』〈第21号〉南方同胞援護会）23-35頁
- 1968年
 - ・『西表島開発参考資料』（沖縄経済開発研究所）
- 1970年
 - ・大田政作「西表島開発調査」『思い出を随筆にのせて』（北島健三）256-258頁
- 1972年
 - ・第1節「日本政府の対米折衝」『沖縄復帰の記録』（南方同胞援護会）86-89頁。
- 1983年
 - ・仲宗根勇「西表開発構想」（『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社）247頁
 - ・池田光男「西表島農業調査報告書」（『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社）248頁
 - ・池田光男「スタンフォード調査報告書」（『沖縄大百科事典』〈中巻〉沖縄タイムス社）530頁
- 1985年
 - ・第1章「戦災復興のための西表開発」『戦災復興のための西表開発記念誌』（西表開発友の

会) 16-37頁

- 2001年 ・ 「池田・ケネディ会談」(225-230頁)、「ケイセン報告」(230-236頁)『日米同盟半世紀
—安保と密約—』(朝日新聞社) 頁
- 2014年 ・ 仲地博「高等弁務官メッセージ」(沖縄県議会事務局編『沖縄県議会史』〈第3巻通史編3〉
沖縄県議会) 72-75頁
- ・ 第5節「ケイセン調査団とケネディ新政策」(沖縄県議会事務局編『沖縄県議会史』〈第3
巻通史編3〉沖縄県議会) 96-100頁

結びにかえて

西表開発は日米琉で取り組んでいながら〈幻〉に終わった。それはどうしてなのか。その経過を見直し、内実に迫ることは、西表島の未来を考えるうえで有意義なことであろう。

このたびは主に文献資料を対象としたが、地形図、地質図とともに、さまざまな地図を活用した研究を今後期待したい。例えば、1968年の『西表島開発参考資料』には、「西表島土地利用区分図」、「主要河川とその流域及び水利用計画図」、「西表島の牧場開発計画設定図」(1967年7月)、「柑きつ 筍栽培用地」、「西表島の牧場現在図」(1967年6月)の5種の地図が収録されている。

このように既刊の報告書や参考資料には各種の地図が収録されているが、これらと歴史的背景を重ね合わせ、西表島の自然や産業を含めた総合的な研究により、西表島開発の内実を浮き上がらせることができるのではないだろうか。

西表島古見に関する資料

発行年	タイトル	編・著者	書名・資料名	発行所
1715	「西表島古見橋碑文」	大清康熙	上勢頭亨氏所蔵本琉球大学 附属図書館資料 M239	大清康熙54年 8月17日
1889	「琉球西表古見村の土器」	田代安定	『東京人類学雑誌』(No.40)	
1950	「古見」(444～445頁)	東恩納寛惇	『南島風土記』	沖縄郷土文化研究会 南島文化資料研究室
1958	「八重山古見地方における稲作とその信仰行事」(琉球政府文化財保護委員会編)	源武雄	『文化財要覧』(1958年版)	琉球政府文化財保護委員会
1960	「樹齢350年のガジュマルの木〈西表島古見部落〉」	編集部	『今日の琉球』(第4巻第5号)	琉球列島米国民政府 渉外報道局出版課
1960	「東部西表点描〈下〉—いつきても変らぬ古見の部落—」		『八重山毎日新聞』	八重山毎日新聞社
1962	「古見へ」(142～150頁)	本田安次	『南島探訪記』	明善堂書店
1963	「赤マタ白マタ黒マタの祭祀」	宮良高弘	『沖縄タイムス』	沖縄タイムス社
1965	「マブイゴメ(小浜島・波照間島・西表古見)」(16～17頁)	酒井卯作	『南島研究』〈創刊号〉	南島研究会
1965	「カサノムヌン(西表古見)」(17頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第2号〉	南島研究会
1965	「子供祝〈クワンユエ〉(西表古見)」(15～16頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第2号〉	南島研究会
1965	「火の神(波照間島・石垣市・西表古見)」(15頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第2号〉	南島研究会
1966	「海どめ(西表古見)」(16頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「ツナ引き(西表古見)」(17頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「赤米(小浜島・川平・西表古見)」(15頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「被りもの(西表古見)」(15頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「先島の造船(波照間島・西表古見)」(14頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「新築祝(波照間島・西表古見)」(14頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「染料(西表古見)」(14頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1966	「村役(西表古見)」(14頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第4号〉	南島研究会
1967	「古見の島の盛衰」(129～131頁)	柳田国男	『海上の道』	筑摩書房
1967	「八重山古見の豊年祭」	真野俊和	『民俗学評論』〈第1号〉	大塚民俗学会
1967	「セツ(西表古見・小浜島)」(13頁)	酒井卯作	『南島研究』〈第7号〉	南島研究会
1967	「古見の浦節」(292～298頁)「揚古見の浦節」(299頁) 「橋世バ節」(300～303頁) 「ヤクジャーマ節」(304～309頁)	喜舎場永珣	『八重山民謡誌』	沖縄タイムス出版部
1968	「黒マタ・白マタ・赤マタの祭祀—西表島・古見部落の豊年祭—」(85～103頁)	宮良高弘	『札幌大学紀要 教養部論集』〈第1巻第1号〉	札幌大学教養部
1969	「古見の経済的背景」(88～93頁)	成川隆	『八重山調査報告書 一川平・古見—』	早稲田大学アジア学会 第7次八重山調査隊
1969	「古見と教育」(94～101頁)	落合光子	『八重山調査報告書 一川平・古見—』	早稲田大学アジア学会 第7次八重山調査隊
1969	「古見の御嶽」(102～120頁)	高崎彰	『八重山調査報告書 一川平・古見—』	早稲田大学アジア学会 第7次八重山調査隊
1969	「アカマタ・クロマタを信仰する部落」(122～170頁)	池内由二郎	『八重山調査報告書 一川平・古見—』	早稲田大学アジア学会 第7次八重山調査隊
1969	「古見を考える—交通を視点として—」(80～87頁)	三浦元子	『八重山調査報告書 一川平・古見—』	早稲田大学アジア学会 第7次八重山調査隊
1969	「ヤクジャマ異聞」〈1〉〈2〉	黒島寛松	『琉球新報』1969年3月19日—1969年3月20日	琉球新報社
1969	「ヤクジャーマと神秘的なシオマネキ」(92～97頁)	高良鉄夫	『琉球の自然と風物—特殊動物を探る—』	琉球文教図書

1970	「船コギユンタ（古見）」（437～447頁） 「赤マタユンタ（古見）」（447～450頁）	喜舎場永珣	『八重山古謡』（下巻）	沖縄タイムス社
1971	「西表島古見むらのプルー黒マタ・白マタ・赤マタの祭祀―」（241～252頁）	湧上元雄	『まつり』（第17号）	まつり同好会
1972	「古見部落・シロオビヒカゲの決闘」	西山保典	『月刊 むし』（第14号）	
1972	「古見部落」（61～62頁） 「西表最高峰！古見岳」（63～66頁）	琉球大学ワンダーフォーゲル部	『南海の秘境 西表島』	琉球大学ワンダーフォーゲル部
1973	「赤マタの村―西表島・古見拾遺記―」	遊行鬼	『季刊 柳田国男研究』	
1973	「沖縄、八重山歌謡 古見浦ぬぶなれまゆんた」（1～8頁）	宮良安彦	『日本文学論叢』（No.1）	法政大学大学院日本文学研究誌
1973	「八重山歌謡 古見浦ぬぶなれまゆんた」（34～37頁）	宮良安彦	『青い海』（No.20）	青い海出版社
1974	「絵で頭職になった役人」（63～68頁） 「古見の浦物語」（76～78頁）	那根亨	『西表島の伝説』	那根亨
1974	「古見の浦節（古見）」（273～274頁） 「揚古見の浦節（古見）」（274頁） 「橋世バ節（古見）」（274～275頁） 「ヤクジャーマ節（古見）」（275頁）	竹富町誌編集委員会	『竹富町誌』	竹富町役場
1976	「西表島の主要四河川と高那及び古見地域における天然水の化学的調査」	兼島清、渡久山章	『琉球大学理工学部紀要 理学編』（No.22）	
1976	「平西貝塚」（24頁） 「サキ島スオーの木」（28頁）	高嶺正宏	『竹富町の文化財』	竹富町教育委員会
1977	「『黒マタ・白マタ・赤マタ』の祭祀―西表島・古見部落の豊年祭―」（464～479頁）	宮良高弘	『日本祭祀研究集成』（第5巻）	名著出版
1978	「八重山郡古見の葬制聞書」（52頁）	酒井卯作	『南島研究』（第19号）	南島研究会
1978	「太陽の陰―開拓の夢と現実と―」（108～119頁）	下嶋哲朗	『海原の里人たち―八重山諸島聞き書き記―』	理論社
1978	「来訪神（に在るびと）祭祀の世界観―西表島古見の事例から―」	鈴木正崇	『フォークロア』（36～38）	伊勢民俗学会
1979	「来訪神祭祀の世界観―赤マタ・白マタ・黒マタ再考―」	鈴木正崇	『社会人類学年報』（第5号）	東京都立大学社会人類学会
1979	「古見部落のニーロカン」（上）（中）（下）	下地恵三	『八重山毎日新聞』1979年8月28日～1979年8月30日	八重山毎日新聞社
1979	「豊年祈願の神歌」（397頁）、「とくにむとう家でのあかまた一歌」（397頁）、「あかまたゆんた」（397頁）、「古見呂ゆんた」（397～398頁）、「船漕ゆんた」（398～399頁）、「爬竜船競技がおこなわれ、それが終わったあと舟子たちは御嶽へ行く。その時の歌」（399頁）、「通のゆんた」（399～400頁）、「出入のゆんた」（400頁）、「うむとう離りぬゆんた」（400～401頁）、「ままりぬゆんた」（401頁）、「掛け合いのゆんた」（401～402頁）、「雨乞い歌」（582～583頁）	外間守善、宮良安彦・編	『南島歌謡大成 IV 八重山篇』	角川書店
1980	「基礎語彙一覧表―竹富町西表島字古見方言―」	中松竹雄	『琉球大学教育学部紀要』（24）	
1980	「古見旧村跡遺跡」（25頁） 「古見赤石崎遺跡」（25頁） 「平西貝塚」（26頁） 「古見古墓群」（26頁）	岸本義彦	『竹富町・与那国町の遺跡―詳細分布調査報告書―』（沖縄県文化財調査報告書第29集）	沖縄県教育委員会
1980	「古見―その栄枯盛衰」（169～170頁）	高良鉄夫	『沖縄の秘境を探る』	琉球新報社
1980	「古見の島人情の邑」（34～39頁） 「川女姫神物語「組踊り型狂言」（218～220頁） 「民族の信神ニロー舞「古見」（240～243頁）	星勲	『西表島のむかし話』	ひるぎ社

1981	「マヤプシキと著者〈西表古見〉」(2～3頁)「ツルアダン〈西表古見シーラ川附近〉」(20～21頁)	監修・州立ハワイ大学宝玲叢刊編集委員会、ロバートK・境、松井正人、崎原貢	『望郷・沖縄』(第3巻)	本邦書籍
1981	「古見の北端」(74頁)	監修・州立ハワイ大学宝玲叢刊編集委員会、ロバートK・境、松井正人、崎原貢	『望郷・沖縄』(第5巻)	本邦書籍
1981	「古見のサキシマスオウノキ群落」(226頁)	佐久田繁	『おきなわ文化財図鑑』(国・県指定及選択)	月刊沖縄社
1981	「稲が種子あよー」(161～169頁) 「道あよー」(169～174頁) 「ぶなれーまゆんた」(175～188頁) 「ぶなれーまじらま」(188～194頁)	竹富町古謡編集委員会	『竹富町古謡集』(第一集)	竹富町教育委員会
1981	「請原嶽(古見の御嶽)」(233頁)	沖縄県教育委員会	『沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI』(沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集)	沖縄県教育委員会
1983	「西表島古見のサキシマスオウノキ群落—特に群落構造について—」(99～119頁)	日越国昭、新城和治、新島義龍、宮城康一、新納義馬	『西表島天然記念物緊急調査報告書—沖縄県天然記念物調査シリーズ』(第23集—I)	沖縄県教育委員会
1983	「古見」(147～148頁)	牧野清	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見岳」(148頁)	牧野清	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見の浦節」(148頁)	石垣博孝	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見の古墓群」(148頁)	知念勇	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見のサキシマスオウノキ群落」(149頁)	宮城康一	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見の主アヤグ」(149頁)	平良新亮	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見のプーリィ」(149頁)	石垣博孝	『沖縄大百科事典』(中巻)	沖縄タイムス社
1983	「古見」(42～43頁)	白井祥平、佐野芳康	『西表島の自然』	新星図書出版
1983	「スオウの巨木」(20～23頁) 「クバの柄杓と鍋」(24～27頁) 「先島の民具」(28～31頁)	伊藤碩男	『西表島一森と生きものたちの詩』	そしえて
1983	「古見の浦節(クンノラプシ)」(87～89頁)	宮良當莊	『宮良當莊全集』(18)	第一書房
1984	「西表島・後良川のマングロブ林の群落構造と動態」	宮城康一、島袋敬一	『マングロブ生態系に関する生理生態学的研究』(93～111)	
1984	「古見」(57頁)	田中利典	『秘境西表島—ジャングルへのいざない』	新星図書出版
1984	「イリオモテヤマネコの糞調査地⑨菱・古見地点の概況」(9～24頁)	イリオモテヤマネコ生態実験研究室、琉球大学理学部生物学科	『沖縄島嶼研究』(2号)	イリオモテヤマネコ生態実験研究室琉球大学理学部生物学科
1985	「西表島古見岳の植生」(73～82頁)	島袋曠、宮城朝章、天願敏男、新城和治、宮城康一、日越国昭	『西表島天然記念物緊急調査報告書II—沖縄県天然記念物調査シリーズ 第24集—』(II)	沖縄県教育委員会
1985	「西表島高菱・古見両調査地におけるイリオモテヤマネコの糞の分布と消長」(13～29頁)	阪口法明、古波津智代、西平守孝、宮城康一	『沖縄島嶼研究』(第3号)	イリオモテヤマネコ生態実験研究室琉球大学理学部生物学科
1986	「イリオモテヤマネコの糞調査地⑨菱・古見地点の植生変化1」(9～26頁)	宮城康一、島袋敬一、横田昌嗣	『沖縄島嶼研究』(第4号)	イリオモテヤマネコ生態実験研究室琉球大学理学部生物学科
1986	「西表島高菱・古見両調査地におけるイリオモテヤマネコの糞の分布—植生変化による場所利用の変化—」(47～63頁)	阪口法明、古波津智代、西平守孝	『沖縄島嶼研究』(第4号)	イリオモテヤマネコ生態実験研究室琉球大学理学部生物学科
1986	「古見」(363頁)、「古見岳」(364頁)	「角川日本地名大辞典」編集委員会	『角川日本地名大辞典』(47 沖縄県)	角川書店
1987	「西表島の高菱・古見におけるイリオモテヤマネコの糞の分布」(1～7頁)	安倍琢哉	『沖縄島嶼研究』(第5号)	イリオモテヤマネコ生態実験研究室琉球大学理学部生物学科

1987	「神々の行動伝承—八重山郡古見、小浜、新城、宮良の豊年祭をめぐって—」	増田和彦	『野州国文学』〈No.40〉	
1987	「古見の浦の神と歴史」	新川明	『新南島風土記』	朝日新聞社
1988	「古見村のアカマタ神」(70～71頁)	前花哲雄	『八重山の歴史と民話』	前花哲雄
1988	「船浦の『すら所』仮実測—古見のすら所と似た立地—」(11～12頁)	里井洋一	『地域と文化』〈第48号〉	南西印刷出版部(ひるぎ社)
1988	「古見」(129～134頁)	金城朝夫	『ドキュメント 八重山開拓移民』	あーまん企画
1989	「サキシマスオウノキ群落(古見)」(29頁)	横塚眞己人	『原色のパラダイス イリオモテ島』	新日本教育図書
1989	「東から」(61頁)、「雨乞いユンタ」(81頁)、「我がうん田の米」(121頁)、「蓋笹っ子」(122頁)、「家戸の棧の」(123頁)、「一人ある女の子」(124頁)、「あんがりちゃ」(264頁)、「家造りのユンタ」(303頁)、「南さくだのユンタ」(423頁)、「南さく—だのジラバ」(424頁)、「橋ゆば節」(544頁)、「揚古見の浦節」(546頁)、「やくじゃーま節」(549頁)		『日本民謡大観(沖縄奄美)』〈八重山諸島篇〉	日本放送出版協会
1990	「平西御嶽」(434～435頁)、「請原御嶽」(435～436頁)、「宇根御嶽」(436～437頁)、「大枝御嶽」(437頁)、「三離御嶽」(437～439頁)、「兼真御嶽」(440～441頁)	牧野清	『八重山のお嶽—嶽々名・由来・祭祀・歴史—』	あーまん企画
1990	「三離御嶽(本司) 宮良ヤスヨ」(286～288頁)、「シタツ御嶽(本司) 吉嶺ヲナリ」(288～289頁)、「与那原御嶽(本司) 富里サカイ」(289頁)、「ヲカ御嶽(本司) 高オナヒト」(289～290頁)、「小離御嶽(本司) 新本ヨルイ」(290～291頁)、「カメ山お嶽(本司) 友利フミ」(291～293頁)	中山盛茂、富村真演、宮城栄昌	『のろ調査資料—一九六〇年～一九六六年調査—』	ボーダーインク
1991	「西表島高菱・古見両調査地の植生変化とイリオモテヤマネコの糞の分布と消長」(1～12頁)	阪口法明、西平守孝	『沖縄島嶼研究』〈第9号〉	イリオモテヤマネコ生態実験研究室 琉球大学理学部生物学科
1991	「古見のアカマタ・クロマタ・シロマタ」(104～105頁) 「古見のアンガマ」(123頁) 「古見の節祭」(204頁) 「古見の獅子舞」303～304頁	本田安次	『沖縄の祭と芸能』〈南島文化叢書13〉	第一書房
1993	「古見のサキシマスオウノキ群落」(16～17頁)	沖縄広報センター	『沖縄の緑と自然—第44回全国植樹祭記念誌—』	全国植樹祭沖縄県実行委員会
1993	「公民館事例報告」		『公民館事例報告』	古見公民館
1993	「揚古見ぬ浦節」(129頁) 「古見ぬ浦節」(130～131頁) 「橋世ば節」(132～134頁) 「やくじゃーま節」(135～137頁)	仲宗根長一	『八重山歌謡集』	仲宗根長一
1993	「祭りがやりにくくなってきたね：古見部落 富里サカイ」(81頁)	富里サカイ	『ばいぬしまじま—町制施行45周年記念誌』	竹富企画課
1994	「西表島古見の結願祭と狂言」(1～37頁)	波照間永吉	『沖縄芸術の科学』〈第7号〉	沖縄県立芸術大学附属研究所
1994	写真：西表島古見の結願祭	竹富町役場企画課	広報『たけとみちょう』〈10月No.195号〉	竹富町役場企画課
1994	写真：西表島古見の狂言「亀組」 「西表島古見の結願祭の芸能「亀組」」(114～119頁)	波照間永吉	『沖縄県の民俗芸能—沖縄県民俗芸能緊急調査報告書』〈沖縄県文化財調査報告書第112集〉	沖縄県教育委員会

1994	「古見赤石崎遺跡」(71頁)	沖縄県教育長文化課	『ぐすくーグスク分布調査報告書(Ⅲ)ー八重山諸島ー』(沖縄県文化財調査報告書第113集)	沖縄県教育委員会
1995	写真:古見スラ所跡(72頁) 「竹富町・与那国町の生産遺跡一覧 古見スラ所跡」(73~75頁)	沖縄県教育庁文化課	『生産遺跡分布調査(Ⅰ)ー県内生産遺跡分布調査報告ー』(沖縄県文化財調査報告書第119集)	沖縄県教育委員会
1995	「西表島の開拓移住地 古見(こみ)」(35頁)	石垣市総務部市史編集室	『石垣市史巡見VOL・3 村むら探訪ー開拓の村むら を歩くー』	石垣市役所
1996	「ナサマ・満慶恋物語」	桃原由紀子	『琉球新報』「落ち穂欄」 1996年4月13日	琉球新報社
1996	「古見のイヤル」	桃原由紀子	『琉球新報』「落ち穂欄」 1996年5月29日	琉球新報社
1996	「(二)古見ー集落の概況ー」(552~557頁)	竹富町史編集委員会 町史編集室	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 大変だった空襲下での生活」(558~561頁)	富里サカイ	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 避難小屋と自宅二重生活」(561~562頁)	大底マアチ	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 戦時下の古見部落の状況」(563~566頁)	吉峯セツ	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 石垣島海軍警備隊に入隊」(567~571頁)	山里寅吉	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1996	「戦争体験記 戦争で許婚を亡くして」(572~574頁)	次呂久弘起	『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』	竹富町役場
1997	「ぴーとうりゃーあるみどうぬふぁー」(213~222頁)	石垣繁	『竹富町古謡集』(第二集)	竹富町教育委員会
1997	「古見小に環境庁長官賞ー第31回全国野生生物保護発表会」(10頁)	竹富町役場企画課	広報『たけとみちょう』(1月No.222号)	竹富町役場企画課
1997	「竹富町古見のプーリィ」(180~185頁)	波照間永吉	『沖縄県の祭り・行事ー沖縄県祭り・行事調査報告書ー』(沖縄県文化財調査報告書第127集)	沖縄県教育委員会
1998	『古見小学校創立100周年記念誌 夢の花』	『古見小学校創立100周年記念誌 夢の花』	竹富町立古見小学校創立100周年記念事業期成会	
1998	『沖縄芸術の科学ー「西表島古見の伝統文化の調査研究」ー』(第10号)	沖縄県立芸術大学 附属研究所	『沖縄芸術の科学ー「西表島古見の伝統文化の調査研究」ー』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見村のくらし」(1~35頁)	大底朝要	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見の集落と八重山の造船」(37~46頁)	小野まさ子	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見のプーリィの祭祀と歌謡」(47~111頁)	波照間永吉	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見の結願祭と狂言」(113~165頁)	波照間永吉	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見の結願祭」(167~180頁)	大城學	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見の伝統民俗芸能」(181~260頁)	森田孫榮	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「古見の屋号」(261~263頁)	大底朝要	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所

1998	「古見方言の基礎語彙」(265～320頁)	加治工真市	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「『西表島古見の伝統文化の調査研究』を終えるにあたって」(321～324頁)	波照間永吉	『沖縄芸術の科学』(第10号)	沖縄県立芸術大学附属研究所
1998	「揚古見之浦節」(1頁) 「古見之浦節」(64頁) 「古見ぬ主」(70～71頁) 「やくじゃーま節」(268～269頁)	滝原康盛	演奏実用シリーズ『正調琉球民謡八重山・宮古編』	滝原康盛
1999	「西表島古見のプーリィの祭祀と歌謡」(340～412頁) 「西表島古見の結願祭と狂言」(691～737頁)	波照間永吉	『南島祭祀歌謡の研究』	砂子屋書房
1999	《写真にみるわが町》「古見の十五夜綱引き」(13頁)	竹富町史編集室	『竹富町史だより』(第15号)	竹富町史編集室
1999	「古見小学校 待望の体育館落成を祝う!!—地域の生涯学習にも活用—」(4頁)	竹富町役場企画課	広報『たけとみちよう』(7月No.252号)	竹富町
2000	「雨・ちきじき」(215～222頁)	石垣繁	『竹富町古謡集』(第三集)	竹富町教育委員会
2000	「西表島古見むらのプルー黒マタ・白マタ・赤マタの祭祀—」(181～191頁)	湧上元雄	『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽』	榕樹書林
2001	〈聖地めぐり〉「与那良御嶽」(8頁)、〈記念碑を訪ねて〉「三離橋碑、大枝橋碑」(10～11頁)	竹富町役場町史編集室	『竹富町史だより』(第19号)	竹富町役場町史編集室
2001	「〈文化財探訪16〉古見赤崎スラ所」(5頁)、「古見」(27～28頁)	竹富町役場町史編集室	『竹富町史だより』(第20号)	竹富町役場町史編集室
2002	〈聖地めぐり19〉「三離御嶽・兼真御嶽」(6頁)	竹富町役場町史編集室	『竹富町史だより』(第22号)	竹富町役場町史編集室
2002	「『古見の浦の里』・『海人の家』が着工関係者が工事の安全祈願」(2頁)	竹富町役場企画課	広報『たけとみちよう』(2月No.269号)	竹富町役場企画課
2002	「“やったね”安海さん!」(沖縄県児童生徒等表彰受賞 喜納安海さん古見小学校)(14頁)	竹富町役場企画課	広報『たけとみちよう』(4月No.271号)	竹富町役場企画課
2002	西表島古見「『古見の浦の里』が完成 地域活性化の拠点施設に期待」(2頁)	竹富町役場企画課	広報『たけとみちよう』(8月No.275号)	竹富町役場企画課
2002	「船漕ぎ・ゆんた」(175～181頁)	石垣繁	『竹富町古謡集』(第四集)	竹富町教育委員会
2002	「古見村」(719～720頁)、「古見スラ所跡」(720頁)、「三離村」(720頁)、「三離御嶽」(720～721頁)、「大枝村」(721頁)、「平西村」(721～722頁)、「平西貝塚」(722頁)、「与那良村」(722頁)、「与那良遺跡」(722頁)	平凡社地方資料センター	『沖縄県の地名』(日本歴史地名大系第48巻)	平凡社
2003	「古見のミツケーと鹿川のナサマ」(55～61頁)	狩俣恵一、丸山顕徳編	『琉球の伝承文化を歩く2—西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話—』	三弥井書店
2003	「西表島古見の結願祭」(382～450頁)	大城學	『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』(琉球叢書6)	砂子屋書房
2003	「古見のヤクジャーマ節」(16～17頁) 「サキシマスオウの樹」(18頁) 「ヌスクのフカクムル」(19頁) 「戦後の食糧難と鯨の巨体」(103～104頁)	西大舩高老	『南の島の物語』	大里印刷
2004	「大底朝要」(100～101頁)	文/石盛こずえ 写真/今村光男	『八重山人の肖像』	南山舎
2004	「古見の浦節」	通事孝作	『琉球新報』「落ち穂欄」 2004年10月26日	琉球新報社
2005	「古見のサキシマスオウノキがおきなわの名木百選に!」(9頁)	竹富町役場企画課	広報『たけとみちよう』(4月No.299号)	竹富町役場企画課

2005	「あかまた・ゆんた」(161～162頁)「船を漕ぎつつ謡う歌」(163～164頁)、「各戸を訪ねる時の神歌」(164頁)、「とうにむとう家でのあかまた一歌」(165～166頁)	石垣繁	『竹富町古謡集』(第五集)	竹富町教育委員会
2005	『民俗研究－西表島古見村の結願祭調査報告』(第34号)	沖縄国際大学総合文化学部 社会文化学科稲福研究室	『民俗研究－西表島古見村の結願祭調査報告』(第34号)	沖縄国際大学総合文化学部 社会文化学科稲福研究室
2006	「古見岳」(94～95頁)	林秀美、西野美和子、玉城庸次、与儀豊、伊波卓也、おりべえりあ、松島昭司、大武美緒子、羽根田治、谷崎樹生	『沖縄県の山』(新・分県登山ガイド46)	山と溪谷社
2006	「西表島古見のことば」(111～149頁)	中松竹雄	『沖縄県八重山のことば』	沖縄言語文化研究所
2009	天然記念物「古見のサキシマスオウノキ群落」(5頁)、小中学校のシンボル「古見小学校のガジュマル」(10頁)、ゆらいのある木「古見のリウキュウマツ」(28頁)、地区ごとの大きな木「古見岳登山道のリウキュウコクタン」(32頁)、「古見岳登山道のフクギ」(3頁)	九州森林管理局 西表森林環境保全ふれあいセンター	『西表島の名木集』	竹富町教育委員会
2010	「八重山民俗紀行－黒潮生まれる海域の人と風俗－「古見という地名」(147～149頁)	戸井田克己	『民俗文化』(第22号)	近畿大学民俗学研究所
2012	《記念碑を訪ねて》8「古見塩浜原開拓記念碑」(15頁)	竹富町教育委員会	『竹富町史だより』(第33号)	竹富町教育委員会
2012	やいま昔語り「西表島・古見 大底朝要さん」(34～35頁)	南山舎編集部	『月刊やいま』(No.221)	南山舎
2013	「古見ぬ浦節」(2頁) 写真「古見村」(3頁) 「ヤクジャーマ節」(4頁) 「缸世ば節」(6頁)	石垣金星、平良彰健	『西表島の民謡』	特定非営利活動法人西表島エコツーリズム協会
2014	《むかし八重山第192回》「古文書にみる西表島の北岸を通る古見島北堅道」(40頁)	通事孝作	『月刊やいま』(No.252)	南山舎
2015	「古見村結願祭」(17頁)	竹富町教育委員会	『竹富町史だより』(第36号)	竹富町教育委員会
2015	《むかし八重山第202回》「古見村の南方にある前良川に架かる旧・三離橋」(頁数)	通事孝作	『月刊やいま』(No.262)	南山舎
2017	「西表島古見集落の口承文芸」(32～38頁)	星野岳義	『竹富町史だより』(第39号)	竹富町教育委員会
2018	「島じまの踊り・狂言 「缸ゆば節」(西表島古見)」(4～6頁)	飯田泰彦	『竹富町史だより』(第42号)	竹富町教育委員会
2018	「琉球旅日記 (14)」(1～3頁)	酒井卯作	『法政大学沖縄文化研究所報』(第82号)	法政大学沖縄文化研究所
2018	「琉球旅日記 (15)」(3～4頁)	酒井卯作	『法政大学沖縄文化研究所報』(第83号)	法政大学沖縄文化研究所
2018	「古見公民館結願祭等の継承にむけて始動」(5頁) 「47 西表島古見」	竹富町役場総務課 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	広報『たけとみちよう』(11月号No.435)	竹富町役場総務課 沖縄県教育委員会
2019	「請原御嶽」(114～115頁) 「三離御嶽・兼真御嶽」(116～117頁) 「慶田城御嶽・平西御嶽」(118～119頁)	李春子	『沖縄県史研究叢書18 沖縄の民俗資料』(下) 『八重山の御嶽－自然と文化－』	榕樹書林
2020	竹富町学校だより「古見小学校：様々な海洋学習を実施」(10頁)	竹富町役場総務課	広報『たけとみちよう』(1月号No.447)	竹富町役場総務課
2020	「古見岳」(30～31頁)	堀井大輝	ネイチャーガイド『西表島の自然図鑑』	メイツユニバーサルコンテンツ
2020	「西表「古見の銭太鼓」封印を前に最後の舞」(58頁)	山川夏子	『オキナワグラフ』(No.694)	新星出版
2020	「〈長者の大主〉系芸能の実際－西表島古見村の結願祭から－」(2～5頁)	竹富町教育委員会	『竹富町史だより』(第46号)	竹富町教育委員会
2020	竹富町学校だより「古見小学校：海洋教育の取り組み」(5頁)	竹富町役場総務課	広報『たけとみちよう』(10月号No.455)	竹富町役場総務課
2021	竹富町内文化財(天然記念物)の紹介「古見のサキシマスオウノキ群落」(6頁)	竹富町役場総務課	広報『たけとみちよう』(9月号No.465)	竹富町役場総務課

2022年度 受贈図書一覧

書誌 (書名、発行所、発行年)	編著者・編集	寄贈者
『アメリカ世の軌跡－【写真年表】でたどる沖縄・米軍統治の時代－』(一般社団法人沖縄しまたて協会、2022年)	三嶋啓二	一般社団法人沖縄しまたて協会
『「伊江島考察史」伊是名牛助著(第一分冊 影印・翻刻文・現代語訳編)』(伊江村教育委員会、2022年)	伊江村教育委員会、伊江島考察史現代語訳検討委員会	伊江村教育委員会
『「伊江島考察史」伊是名牛助著(第二分冊 解説編)』(伊江村教育委員会、2022年)	伊江村教育委員会、伊江島考察史現代語訳検討委員会	伊江村教育委員会
『稲の旅と祭り－シチと種子取祭』(榕樹書林、2021年)	大城公男	通事孝作
『NHK番組 Journeys in Japann』(日本語編) DVD 1枚(日本国際放送、2022年)	株式会社 日本国際放送	広田麻子
『沖縄県公文書館研究紀要』(第24号)(沖縄県公文書館指定管理者(公財)沖縄県文化振興会 公文書管理課、2022年)	沖縄県公文書館指定管理者(公財)沖縄県文化振興会 公文書管理課	沖縄県公文書館指定管理者(公財)沖縄県文化振興会
『沖縄県史』(各論編7 現代)(沖縄県教育委員会、2022年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『沖縄県史』(資料編26－ベッテルハイム日誌および公式書簡 part 1 (1845－51) 近世4)(沖縄県教育委員会、2022年)	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班
『沖縄県平和祈念資料館年報』(第22号)(沖縄県平和祈念資料館、2022年)	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
『沖縄文化研究』(第49号)(法政大学沖縄文化研究所、2022年)	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『恩納村史』(第3巻戦争編)(沖縄県恩納村役場、2022年)	恩納村史編さん委員会	沖縄県恩納村役場
『感謝 島とともに生きた88年－「民宿泉屋」は私と父ちゃんの宝物』(上勢頭達子ファーマーズ)	上勢頭達子ファーマーズ	上勢頭保
『喜舎場永珣と資料－八重山文化研究の礎を築いた－』(石垣市立八重山博物館、2022年)	石垣市立八重山博物館	米盛恭子
『久米島町史別冊久米島町誕生20年のあゆみ』(久米島町役場、2022年)	久米島町史編集委員会	久米島町教育委員会
『群青の絆－大原中学校18期古希記念誌』(大原中学校18期古希記念誌編集委員会、2022年)	大原中学校18期古希記念誌編集委員会	山盛力、大城辰彦
『建築士』(Vol. 70・No.823)(公益社団法人日本建築士会連合会、2021年)	公益社団法人日本建築士会連合会	上勢頭保

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『崎山村探訪メモー平成三年度遠足』（竹富町立船浦中学校、1991年）	竹富町立船浦中学校	西前津松市
『島の味歳時記 竹富町食生活改善推進協議会～結成30周年記念事業～』（竹富町食生活改善推進協議会、2022年）	竹富町食生活改善推進協議会	竹富町役場健康づくり課
『市民の戦時・戦後体験記録ーあのことわたしはー』（第一集）（石垣市役所、1992年）	石垣市史編集室	石垣市史編集
『市民の戦時・戦後体験記録ーあのことわたしはー』（第二集）（石垣市役所、2000年）	石垣市史編集室	石垣市史編集室
『市民の戦時・戦後体験記録ーあのことわたしはー』（第三集）（石垣市役所、1985年）	石垣市史編集室	石垣市史編集室
『市民の戦時・戦後体験記録ー附・関係資料ー』（第四集）（石垣市役所、1988年）	石垣市史編集室	石垣市史編集室
『資料館だより』（第41号）（沖縄県平和祈念資料館、2021年）	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
『資料館だより』（第42号）（沖縄県平和祈念資料館、2022年）	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
『資料館だより』（第43号）（沖縄県平和祈念資料館、2022年）	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
『戦前の中城』（沖縄県中城村教育委員会生涯学習課、2022年）	沖縄県中城村教育委員会生涯学習課	沖縄県中城村教育委員会生涯学習課
『第34回平和創造展「沖縄戦と読谷村の軍事要塞化」展示資料集』（読谷村教育委員会文化振興課、2022年）	読谷村教育委員会文化振興課読谷村史編集室	読谷村教育委員会文化振興課読谷村史編集室
『東京竹富郷友会会報たけとみ』（第60号）（東京竹富郷友会、2022年）	市村高也・有田静人	大内直美
『竹富島と共に歩む』（阿佐伊イチ子、2022年）	阿佐伊孫良	阿佐伊イチ子
『中城村の沖縄戦』（資料編）（中城村教育委員会、2022年）	中城村教育委員会生涯学習課文化係	中城村教育委員会生涯学習課文化係
『中琉歴史関係檔案 光緒朝（一）』（國家圖書館出版社、2022年）	中國第一歴史檔案館編	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『中琉歴史関係檔案 光緒朝（二）』（國家圖書館出版社、2022年）	中國第一歴史檔案館編	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『中琉歴史関係檔案 光緒朝（三）』（國家圖書館出版社、2022年）	中國第一歴史檔案館編	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『73歳生り年記念誌』（竹富モーモー会、2021年）	73歳生り年の集い実行委員会	上勢頭保
『ふるさとを謡う』（八重山古典民謡保存会玉代勢泰興研究所）	玉代勢泰興	玉代勢泰興

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『法政大学沖縄文化研究所所報』〈第89号〉（法政大学沖縄文化研究所、2022年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『星砂の島』〈第19号〉（全国竹富島文化協会、2020年）	亀井保信	上勢頭保
『祭りを支える小浜島の染め織り』（2022年）	知念かねみ	知念かねみ
『宮古島市 neo 歴史文化ロード綾道（下地南・上野野原コース）』（宮古島市教育委員会、2022年）	宮古島市教育委員会	宮古島市教育委員会
『宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（3）－平良地区－』（宮古島市教育委員会生涯学習振興課、2022年）	宮古島市教育委員会	宮古島市教育委員会
『民衆史の狼火を－追悼 色川大吉』（不二出版、2022年）	三木健	三木健
『民俗芸能大会－美ら島おきなわ文化祭2022連携事業－』（第64回九州地区パンフレット、2022年）	美ら島沖縄文化祭2022	
『八重瀬町史－戦争編』（八重瀬町教育委員会、2022年）	八重瀬町史戦争編専門部会	八重瀬町教育委員会生涯学習文化課
『八重山漁協地域漁業活性化計画書』（八重山漁業協同組合、1990年）	八重山漁業協同組合	波照間純一
『八重山における石造建築物－黒島の城跡及び石造建築物－』（九州地区工業教育研究協議会沖縄大会記念誌、1993年）	玉代勢泰興	玉代勢泰興
『ヤマネコのいる暮らし』	J T E F 西表島支部やまねこパトロール	竹富町教育委員会教育課
『与那原町史 図説編 与那原 自然と人』（与那原町史編集委員会、2022年）	与那原町教育委員会	与那原町教育委員会
『琉球の方言』〈第45号〉（法政大学沖縄文化研究所、2022年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『歴代宝案』〈訳注本第15冊〉（沖縄県教育委員会、2022年）	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班
『『歴代宝案』訳注本第15冊語注一覧表』〈歴代宝案編集参考資料23〉（沖縄県教育庁文化財課史料編集班、2022年）	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班
『忘勿石之碑修復報告会並びに慰霊祭』（忘勿石之碑修復・波照間島戦争マラリア犠牲者戦没者慰霊之碑建立期成会、2022年）	忘勿石之碑修復・波照間島戦争マラリア犠牲者戦没者慰霊之碑建立期成会	西前津松市

第44回竹富町史編集委員会議事録



下記のとおり、第44回竹富町史編集委員会を開催した。

日 時 令和4年12月2日（金）午後1時半～午後4時半

場 所 竹富町役場大会議室（2階）

- 議 題
- （1）『竹富町史 第八巻 西表島』の進捗状況について（報告）
 - （2）『竹富町史 第四巻 黒島』の進捗状況について（報告）
 - （3） その他

倉橋正氏写真寄贈報告、提言「博物館構想について」の報告、引越報告など。

出 欠

出席者は、竹富町史編集委員13人（石垣久雄委員長、里井洋一副委員長、新本光孝、池田克史、西表隆夫、上江洲儀正、大城肇、大浜修、狩俣恵一、島村賢正、通事孝作、三木健、吉川英治、）。当局より社会文化課課長（根原健）、町史編集係3人（飯田泰彦、米盛恭子、新城良乃）の計17人。欠席は西里喜行、花城正美。

編集委員会に先だって、社会文化課課長・根原健より、「『黒島編』『西表島編』の刊行について、スケジュール管理をしっかりと行い、計画通り刊行していただきたい」と挨拶。

続いて、石垣久雄委員長より、いくつかの報告があった。一つ目にサッカーワールドカップの日本勝利のニュース、二つ目に「八重山毎日文化賞正賞」に島村賢正委員。三つ目に故・石垣金星委員と、西表島編で執筆してくださった故・川平成雄氏のお二人が「八重山毎日文化賞特別賞」を受賞。四つ目に、秋の叙勲では新本光孝委員の「瑞宝中綬章」を受賞。

その後、事務局より、「経過報告」として、2022年度の町史編集係の動向を中心に報告した。

議題(1)『竹富町史 第八巻 西表島』の進捗状況について（報告 部会長・里井洋一）

2022年07月13日 第43回竹富町史編集委員会にて進捗状況を報告。

2022年11月15日 第19回西表島編専門部会開催。

○石垣金星氏の逝去（令和4年6月30日）後、里井洋一副部会長が部会長代理として、活動を継続してきたが、改めて部会長、副部会長を選任し、継続して活動していくことになった。

部会長：石垣金星（旧）→里井洋一（新）、副部会長：里井洋一（旧）→大浜 修（新）

○編集スケジュールの見直しについて、町史編集委員会へ承認をお願いしたい。

理由：役場移転。部会長死去。原典確認の遅れ等。

〈上巻〉印刷製本（11月）→ 令和5年3月に見直し。令和4年度内印刷製本。

* 版下原稿の参考文献への確認作業にかなりの時間を要しており、当初予定での印刷は厳しい状況である。内容の精度を高めるうえでも、確認作業を怠ることはできないため、年度内印刷製本を目指していきたい。

〈下巻〉版下制作（令和4年度に上巻と並行作業予定）→未定。

印刷製本（令和5年度）→未定。

* 未提出原稿の再検討等により、令和4年度中の版下制作は厳しい。当初〈上巻〉と同時進行で令和4年度に〈下巻〉の版下制作を行う予定であったが、〈上巻〉の確認作業の遅れや〈下巻〉未提出原稿の提出遅れ、部会長の逝去などにより、未提出となった原稿の新しい執筆者を選考し依頼する等、〈下巻〉の進捗についてかなりの遅れが出ている。まずは〈上巻〉の印刷製本に専念し、〈下巻〉の発刊については一時保留としたい。

□ 〈下巻〉未提出原稿の確認、新たな執筆者、担当の割り振り、〈下巻〉第7章「人と暮らし」第2節「衣食住と暮らし」に、新しく第4項「水と電気」を追加して、東部と西部の水と電気について改めて執筆を依頼する。東部は大浜修氏、西部は池田克史氏が執筆。

□ 人物について

・ 島外の方は検討されて、わりととりあげられていると思うが、島内の人に関しては取りこぼしている人も多いのではないだろうか。神司などの役を務めた方々の名前を挙げるとともに、石垣金星氏など新たに加える人物がいれば名前を挙げる。石垣金星氏は里井洋一氏、米盛重友氏は大浜修氏が執筆。人物編責任者は大浜修氏。

□ 社会生活 西部は池田克史氏が責任者。

□ 西部の伝統文化 歌謡・民俗芸能は大浜修氏が執筆。

※見直し後の構成表については、（別添資料）「西表島編 構成・執筆者一覧表」参照。

議題(2)『竹富町史 第四巻 黒島』の進捗状況について（報告 部会長・西表隆夫）

2022年11月25日に第9回黒島編専門部会が開催された。審議の内容は次のとおり。

2022年度、鳩間真英氏、新城純氏、宮良当皓氏が体調不良のため、専門部会を辞任された。その欠員補充について、第8回専門部会において、那根真氏が推薦され、このたび那根氏への委嘱が交付された。

進捗状況などについて、「黒島編構成&執筆者分担表」〈総項目第12次案〉（2022年11月）をもとに、

ひとつずつ確認した。原稿は約6割が提出済であるが、これらのなかにはいったん取り下げられたものも含まれている。また提出原稿のなかには条件（字数、引用箇所のコピー添付、写真添付など）を満たしていないものが大半を占めている。これらについては、執筆者に対して厳しく請求することを事務局に求められた。

2025年度の刊行に向けて、特に参考文献や、引用文献の確認について、時間を要することが考えられるので、残りの原稿についても早めに督促する必要がある。

「序章」（當山善堂）は、既刊書とのバランスを考慮し、集落の移り変わりの項目を加えることになった。歴史的な変遷については通事孝作氏、現在の集落については那根真氏が執筆することになった。

第3章「戦後のあゆみ」について、第14章「年表」をもとに西表隆夫氏、那根真氏が分担して執筆することになった。

第4章「人と暮らし」の（2）「衣と暮らし」、（3）「食と暮らし」について当初、民俗学者・増田昭子氏の貴重な研究調査ノート（箇条書き）を転載する予定であったが、「島じま編」の体裁に整える必要があるため、いったん「増田ノート」として『竹富町史だより』に掲載し、これを参照しながら文章化・原稿化することになった。遺族の了解済。

第8章第1節「農業」については、執筆者を新城純氏から那根真氏に変更。

第10章「保健・衛生」について、第1節で概説を述べ（通事孝作氏）、第2節以下（當山善堂氏）で具体的な内容を記すことになった。

第13章「人物」について、これまで調査票を関係者に配布したが、しっかり回収できていない。基準を明らかにし、その条件に応じた人物を網羅しなければ、混乱を招くことになるので、注意して取り組むこと。

その他、「子どもの遊び」（第7章）、「養蚕」（第8章）、「製塩」（第8章）、「娯楽・競技」（第12章）など、章・節として成立しないようであれば、コラムとしてとりあげるよう努めることになった。

『黒島編』の刊行スケジュールについて、発刊計画は2025年度（令和7年度）刊行。

議題(3) その他

① 『自然編』について（報告 部会長・新本光孝）

部会長・新本光孝氏より「総合目次」〈第6次案〉の提案があり、章・節・項レベルの内容まで確認された。委員から竹富町をアピールするうえでも「サンゴ礁」の項目の充実を求められた。

原稿の執筆や資料・写真の提供については、大方の了承を得ているので、今後の公的な手続きを経ながら、編集作業を着実に進めていく計画が述べられた。

② 発刊計画について（提案 町史編集係）

当初の計画は次のとおり（第43回編集委員会）。「備考」欄に現在の状況についての記述を加えた。

年 度	刊 行 物	備 考
2022年度	<ul style="list-style-type: none"> 『竹富町史 第八巻 西表島』〈上巻〉 『竹富町史だより』〈第50号〉〈第51号〉 	〈第50号〉発刊済。
2023年度	<ul style="list-style-type: none"> 『竹富町史だより』〈50号合冊〉 『竹富町史だより』〈第52号〉〈第53号〉 	<p>現在、『西表島』〈下巻〉の原稿がそろっていないため、発刊計画の見直しが必要。</p> <p>→竹富町制75周年につき、『竹富町史だより』の50号合冊本の刊行(第43回編集委員会で承認)。</p>
2024年度	<ul style="list-style-type: none"> 『竹富町史 第八巻 西表島』〈下巻〉 『竹富町史だより』〈第54号〉〈第55号〉 	
2025年度	<ul style="list-style-type: none"> 『竹富町史 第四巻 黒島』 	
2026年度～	<ul style="list-style-type: none"> 『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成』〈10～15〉。 	<ul style="list-style-type: none"> 『竹富町史 第十一巻 新聞集成X』(1976年) →あと6冊。

『竹富町史 第八巻 西表島』〈下巻〉(以下、『西表島編』〈下巻〉と略記)について、西表島編専門部会の旧部長・石垣金星氏が6月に逝去されたが、石垣氏の執筆担当する原稿が多く、それらのうち提出原稿については専門部会が引き継ぐことになり、また未提出箇所については新たに原稿依頼をしなければならない状況が生まれた(第19回西表島編専門部会)。

現実的な対応を考えたとき、発刊計画の見直しが必要とされる。『西表島編』〈下巻〉の刊行は、2024年度に変更し、それに伴って『竹富町史 第四巻 黒島』は2025年度に発刊することが決まった。

また、第43回町史編集委員会で『竹富町史だより』の50号合冊本の刊行が既に承認されていることから、2023年度は『竹富町史だより』合冊本の発刊することに計画を改めたい。この刊行については、編集作業に時間を要さないことから、確実に実現することができると思われる。

『自然編』、『竹富町史 第十一巻 新聞集成X』シリーズは、それぞれ原稿が整い次第、次年度予算として申請して刊行することにする。『竹富町史 第十一巻 新聞集成X』シリーズは1972年(昭和47)まで単年ごとに編集し、あと6冊の刊行で完結する。

〔追記〕第44回編集委員会後、『竹富町史 第八巻 西表島』〈上巻〉の編集作業を続けたが、参考資料の原典確認が膨大に残っていること、写真を選択しキャプションを付す作業が残っており、今後も時間を要す可能性が考えられ、2022年度中の発刊は望めない状況が生じたことを断っておく(2023年2月現在)。

③ 『郷友会編(仮称)』について (提案 部長・狩俣恵一)

『郷友会編(仮称)』について、部長・狩俣恵一氏から、事務局が目次案を作成し、これをもとにして小委員会を開催する計画が提案された。

2022年度竹富町史編集係業務日誌（抄）

2022年

- 3月31日 ・『竹富町史 第七巻 波照間島』〔初版第2刷〕刊行。
- 4月1日 ・倉橋正氏より「竹富島 本土復帰の日」と題した写真約360点の寄贈を受ける。
- 5月1日 ・『月刊 やいま』〈5月号〉の特集「竹富島 本土復帰の日」に写真提供。
- 5月2日 ・竹富町役場新庁舎開庁。
- 5月15日 ・『竹富町史だより』〈第50号〉刊行。
- 5月31日 ・竹富島いんのた会より「刊行物のご寄贈について（依頼）」受理。
- 6月1日 ・倉橋正写真展「竹富島 本土復帰の日」開催（於・役場玄関ロビー）→7/15。
- 6月10日 ・倉橋正氏より「竹富島 本土復帰の日」寄贈&写真展記者会見。
- 6月11日 ・「竹富島「本土復帰の日」写真展—倉橋氏が当日の様子を撮影—来月15日まで竹富町役場」（『八重山毎日新聞』）、「復帰時の竹富島を撮影 360枚贈呈「歴史的資料」（『八重山日報』）。
- 6月17日 ・大森一也「倉橋正「竹富島 本土復帰の日」を観て」（『八重山毎日新聞』）。
- 6月18日 ・「静岡の写真家データ寄贈 復帰時の竹富鮮明に —360枚分役場で展示—」（『琉球新報』）。
- 6月18日 ・竹富町球技大会（→19）。職員、スタッフとして参加。
- 6月28日 ・いんのた会館の新設に伴い、竹富町史の既刊書を寄贈・提供。
- 6月30日 ・石垣金星氏（編集委員、西表島編専門部会長）逝去。
- 7月6日 ・「『竹富町史』など30冊寄贈—町教委が竹富島いんのた会に—」（『八重山日報』）。
- 7月12日 ・「竹富町教委 いんのた会に町史寄贈 —「我が町の歴史学んで」—」（『八重山毎日新聞』）。
- 7月13日 ・第43回竹富町史編集委員会開催。
- 8月1日 ・「博物館構想への提言」（竹富町史編集委員会）。
- 8月2日 ・「竹富町博物館構想 町史編集委員会が提言 各島に資料館整備を —一極集中型に否定的—」（『八重山毎日新聞』）、「竹富町 町史編集委、博物館構想で提言 —適正規模での設置を—」（『八重山日報』）。
- 8月16日 ・仲田正美氏、那根真氏、服部貴美子氏に、『竹富町史 第四巻 黒島』の執筆依頼（竹富町教育委員会社会文化課第439号）。
- 9月15日 ・倉庫の資料移動。→16日。
- 10月8日 ・黒島成人学級。スタッフとして参加。
- 10月9日 ・舞踊伝統保持者公演のパンフレットに「八重山芸能の森への誘い」（飯田泰彦）掲載。
- 10月16日 ・「『沖縄県史 各論編7 現代』刊行記念シンポジウム」。米盛恭子（町史編集係）、那覇出張参加。
- 10月17日 ・写真家・倉橋正氏来庁。竹富島での写真展の報告。
- 10月25日 ・倉橋正氏の写真寄贈について、NHK番組「竹富島 本土復帰の日」放送。

- 10月29日 ・「美ら島おきなわ文化祭2022」の「島々の民俗芸能」。職員、スタッフとして参加。
- 11月2日 ・NHK番組「おはよう ニッポン」で、倉橋正氏の写真について、「竹富島 本土復帰の日」と題して放送。
- 11月13日 ・「八重山芸能フェスティバル」。飯田泰彦（町史編集係）、トークコーナーにパネラーとして参加。
- 11月15日 ・第19回西表島編専門部会。
- 11月25日 ・第9回黒島編専門部会。那根真氏に黒島編専門部会委員に委嘱。
- 12月2日 ・第44回竹富町史編集委員会開催（本号に議事録を収録）。
- 12月28日 ・2022年仕事納め。

2023年

- 1月4日 ・2023年仕事始め。
- 1月10日 ・民俗学者・宮良高弘氏の御遺族より、1970年代八重山における民俗調査時の音声資料の寄贈（竹富町役場2階会議室）。
- 1月26日 ・船浮小中学校から「鹿川村調査報告書」、「鹿川村方位石の拓本」の寄贈受理。
・令和4年度第2回沖縄県地域史協議会。町史編集係3人、スタッフとして参加。
- 2月11日 ・第28回やまねこマラソン。町史編集係3人、スタッフとして参加。
- 2月28日 ・飯田泰彦（町史編集係）、石垣市祭祀動画制作委員会令和4年度第1回会議に出席。
- 3月27日 ・第10回黒島編専門部会開催。
- 3月31日 ・『竹富町史だより』〈第51号〉発刊。



第19回西表島編専門部会



第9回黒島編専門部会

竹富町内の島々に資料館機能を持った施設の設置を

—竹富町史「島々編」を形に—

(提 言)

1. 基本的な考え方について

まず町立博物館構想は、前町政で検討されていた案では、西表東部に約四十億円もの予算をかけて建立するようでありましたが、これが果たして町内八つの島々の博物館と言えるのかどうか、疑問があります。各島々が独自の風土の中で育んできた文化というものを、各島々において展示し、島のよすがとし、誇れるものといえるのか疑問だからであります。つまり、竹富町史編集委員会は各島々編を何年も前からまとめておりますが、これを踏まえて申し上げれば「島々編を形に」ということでもあります。

「島々編」は自慢するわけではありませんが、島の内外の有識者や研究者たちで構成する部会において調査、検討し、まとめ上げられたものであります。島の主な歴史、文化、生活というものが缶詰のように蓄積されております。それは島の人たちにとって誇りであり財産であります。

従って前町政で検討されてきたような西表東部に40億円もかけて一つつくればよいという発想ではなく、各島々にひとつの資料館機能を併設した施設を設置し、東部の施設は東部を含めた各島々の案内をするという位置づけでやるべきではないでしょうか。本物は島に行って見てもらうのです。島の人たちにとっては、自分たちの文化の誇りであり、子どもたちが島について学ぶ場としても活用する、というものでなければなりません。

2. 資料館機能を持った施設の在り方

まず資料館・博物館の全体の構想をどのようなものにするか考えたとき、ちょうど町史編集委員会に相当する全体委員会と、島々編の部会に相当する部会を設置し、町史の「島々編」をテキストに、それをどのような形にしていくかについて、各部会で検討してはいかがでしょうか。

当然、各島々によってその内容も異なりますので、その構成や姿・形も異なってきます。施設のネーミングもその島らしいものにし、島の生活、文化、情報を内外にアピールするようにします。島外に流出している文化財などもこの際、返還や提供を求めて、充実を図るべきであります。そこには住民目線と専門家の目線が求められます。とにかく「島のものは島で」を基本にして、内容をつくり上げていく必要があります。

3. 柔軟な行財政の対応

住民目線と共に大切なのは、行政や財政といった視点も欠かせません。八つの島に資料館をつくるとすれば、それなりの資金も必要ですが、そこは離島の事情を考慮して、多機能型の資料館を目指す必要があります。ここで、我々が提案するのが、まさに資料館機能を併せ持った施設の設置を検討いただきたいところなのです。既存の施設で遊休化しているものの活用や、行政の支所機能の付置、職員も支所要員と資料館の担当を兼務するなど、観光案内や学校の見学にも対応し、支所によっては島内物産の販売機能も付置するなど、地域の実情に見合った柔軟な対応がもとめられます。休憩室や最

近はやりのカフェの設置など、順柔な発想が必要です。

4. 住民の理解と協力

この島々の資料館は「島の人たちのもの」、という意識を島の人たちに持ってもらうことが大切です。従って島の人たちにも何が協力できるかを考えてもらい、町当局からも投げかける必要があります。展示品や資料の寄贈、学校の生徒たちの見学に説明要員として参加してもらうことも必要です。町の職員を退職された方々に力を貸してもらい「資料館友の会」をつくり、勉強会をもつことも必要でありましょう。その点でも、町史編集委員会との連携が求められます。

以上、縷々先走ったことを申し上げましたが、それは当町史編集委員会と資料館機能を持った施設の設置が、密接な関連があると考えからに他なりません。それもスタートが肝心かと思うからです。なんでも東京にまる投げするこれまでの慣行を改め、役所と町民が自分の頭で考え、つくりあげるという方向性を、この機会に実現してほしいからであります。新町長の御英断に期待申し上げ、提言と致します。

2022年7月13日

第43回竹富町史編集委員会

委員長：石垣久雄、副委員長：里井洋一

委員：新本光孝、池田克史、西表隆夫、上江洲儀正、大城肇、大浜修、狩俣恵一、花城正美
島村賢正、通事孝作、西里喜行、三木健、吉川英治

編集後記

『竹富町史だより』〈第51号〉をお届けします。本号は『竹富町史 第七巻 波照間島』（以下、『波照間島編』）「初版第2刷」（増刷）にちなんで、波照間島に関する六つの論者を中心に編集しました。これらの論者には、『波照間島編』発刊後の新資料や、新たな知見が散見できます。

『波照間島編』の「編集後記」に「波照間島は日本最南端の地として、多くの研究者たちが早い時期から関心を抱き、その分野も多岐にわたっています。学問上の領域でいえば、考古学、民俗学などを中心に、豊富にして多彩な研究蓄積がみられます。／専門部会では、これらの内容を島の内側からの視点で検証し主体的に記述すべく、何度も議論しましたが、その都度新たな課題が生まれてくるといった繰り返しでした。その意味において、本書は中間報告とも位置づけられることでしょう」とあるように、町史編集事業に尽きることはありません。

本号収録の『『波照間文化協会』2年余の軌跡』（西前津松市）をみると、『波照間島編』の執筆陣の多くが、1993年（平成5）の波照間島文化協会設立当時から、各自の研究テーマを掲げ、毎月の定例会で研究発表をされていることが分かります。このような地道な活動が『波照間島編』に結実したと思うと感慨深いものがあります。『波照間島編』のみならず、既刊書の「島じま編シリーズ」もさらに調査・研究・報告を重ねていくと、将来「第2版」「新訂増補版」という話もありそうです。

ところで、先日（2023年1月25日）、沖縄県地域史協議会（令和4年度第2回）の研修で、名護宏奈・井口学・赤嶺みゆきの3氏（豊見城市教育委員会）が「自治体及び学校資料の調査収集—地域における戦後史研究に向けて—」というタイトルで発表されたように、公民館や学校に保管された資料も歴史資料としての価値が認められます。

本号収録の『『竹富公民館日誌』の紹介〈抜粋〉—日本復帰後の竹富—』は、これまでに『竹富町史 第二巻 竹富島』、『竹富島と共に歩む—阿佐伊孫良遺稿集—』に収録された資料を修正・整理したのですが、このような公民館の資料をはじめ、そのほか学校沿革誌、PTA新聞なども、許される範囲で取り上げていきたいものです。

いうまでもなく、竹富町の歴史が、事典や教科書などに、余すことなく載っているとは限りません。私たちは地域の資料を十分に活用しながら、主体的に歴史を編んでいく必要があるのではないのでしょうか。

（飯田泰彦）

2023年3月31日発行

竹富町史だより

第51号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp